外務省日誌

自明治三年第一號
至同年第六號

特別
カ5
4299
1

門 カ5
號 4299
卷 1

早稲田大學圖書館
昭30.6.8受
藏書

外務省日誌

凡例

大政ノ復古スルハ丁卯ノ歳ニ係ル戊辰己巳ノ二歳ヲ歴テ庚午ノ春ニ迨ビ鴻基漸ク定リ百事緒ニ就ク今ヤ日誌ノ起本ヲ丁卯ノ歳ニ發スベシト雖ドモ其間事體頗ル紛雜ニ渉リ書類亦散逸ナキニアラズ故ニ姑ク之ヲ置キ先ツ庚午正月ヲ以テ筆ヲ起セリ丁卯爾後ノ事件ハ今方ニ檢査ヲ加ヘ功畢テ補出スベシ

一斯編往事ノ記載ヲ皆ト為スト雖トモ漫リニ

門 カラ
號 4299
卷 1

早稲田大學圖書館
昭和30.6.8
藏書

東京帝國大學圖書

外務省日誌

凡例

大政ノ復古スルハ丁卯ノ歳ニ係ル戊辰己巳ノ二歳ヲ歴テ庚午ノ春ニ迄ビ鴻基漸ク定リ百事緒ニ就ク今ヤ日誌ノ起本ヲ丁卯ノ歳ニ發スベシト雖ドモ其間事體頗ル紛雜ニ渉リ書類亦散逸ナキニアラズ故ニ姑ク之ヲ置キ先ツ庚午正月ヲ以テ筆ヲ起セリ丁卯爾後ノ事件ハ今方ニ檢査ヲ加ヘ功畢テ補出スベシ一斯編往事ノ記載ヲ皆ト爲スト雖トモ漫リニ

筆ニ隨ヒテ汎錄スルヿヲ事トセズ是レ彼我ノ情態内外ノ時事ヲ檢閲スルニ便ナルヲ要スレバナリ

一締約ノ國今已ニ少カラズ從テ書翰ノ往復モ亦繁劇ナレバ悉ク記載スルニ遑アラズ是ヲ以テ其緊要ナル者ヲ鈔錄シ其概要ヲ示ス

一往復書翰中ニ卿輔及ヒ大少丞ト一齊ニ稱呼シ或ハ各々僉名スル者等ハ其時宜ニ因テ之ヲ詳略ス

一各國地名等ノ假字書ニハ「ー」ノ區標姓名ハ右ニ「ー」ノ線標ヲ付ス

外國官名譯例

特命全權公使	アムバサドル
特派全權公使	エンウォイ、エキスタラオルヂナレイ、エンミニストル、プレニポテンチャリイ
全權公使	ミニストルプレニポテンチャリイ
辨理公使	ミニストル、レシデント
代理公使	チャージ、ダエッフェール
總領事	コンシュル、ゼネラール
代辨總領事	アクチング、コンシュル、ゼネラール
領事	コンシュル
代辨領事	アクチング、コンシュル

副領事　ワイス、コンシュル

代辨副領事　アクチングワイス、コンシュル

領事代　コンシュラル、エゼント

書史　セクレタリイ

大日本事務書史　ジャパニーズ、セクレタリイ

書記　チャンセロル

譯司　インタルプレタル

明治三年庚午十二月　外務省文書司

正月中

官員

卿　己巳七月八日任　己巳七月八日叙　従三位守清原朝臣宣嘉澤

大輔　己巳七月八日任　己巳四月十九日叙　従四位守藤原朝臣宗則寺島

少輔

大丞　己巳七月十一日任　戊辰五月四日叙　従五位守藤原朝臣久成町田

柯太己巳九月二日任　出張己巳八月十一日叙　従五位守源朝臣作樂丸山

大丞准席　己巳十月廿九日出仕　戊辰閏四月廿二日叙　従四位藤原朝臣前光柳原

權大丞　柯太己巳九月二日任　出張己巳八月十六日叙　正六位守藤原朝臣道之谷元

己巳十二月四日任　己巳十月二日叙　従六位守大神朝臣元綱三輪田

少丞

新潟出張 己巳七月十二日任 己巳八月廿五日兼叙 従六位守兼水原縣大參事源朝臣良之 水野

庚午正月廿四日歸府 庚午正月廿五日免兼官

己巳七月十二日任 己巳十月二日叙 従六位守源朝臣俊邁 馬渡

庚午正月八日任 無位 田邊朝臣太一 田邊

權少丞

己巳十月三日任 己巳七月十二日叙 正七位守藤原朝臣小一 宮本

大譯官

己巳九月二日任 己巳十月十日叙 従七位守藤原朝臣政方 石橋

己巳九月二日任 己巳十月十日叙 従七位守藤原朝臣嘉度 立

柯太出張 己巳九月二日任 己巳十月十日叙 従七位守鄭 永寧 鄭

己巳九月二日任 己巳十月十八日叙 従七位守橘朝臣宗峻 子安

各國公使領事等

大貌列顛國特派全權公使

サヲ、ハルリー、エス、パークス

書史

フランシス、オッチウキル、アダムス

譯司

アレキサンドル、フォン、シーボルト

伊太利國特派全權公使

コント、アレサンドロ、フェ

佛蘭西國全權公使

マキシムウートレー

書史

コントデベアル

譯司

ジブスケ

米利堅合衆國辨理公使

チャールスイデロング

書史

エルシーポルトメン

荷蘭國辨理公使

エフペーファンドルフーフェン

書記

ドンクルキュルシュス

獨逸北部聯邦代理公使

エムフォンブランド

譯司

ケンプルマン

西班牙國代理公使

ヘブレヌロドリゲエムノズ

横濱在留領事

瑞西聯邦總領事　シ、ブレンワルト

丁抹國總領事　エドワルド、バウヰール

大貌列顛國領事　エフ、ゼ、ロウドル

荷蘭國領事　ウエ、ファン、デル、タック

獨逸北部聯邦領事

エ、ライス

葡萄牙國領事　エドワルドロレーロ

白耳義國領事　エル、ストロース

伊太利國領事　シ、ロベーチ

米利堅合衆國領事　レミエール、ライオン

佛蘭西國領事代

デ、ラペロース

大坂在留領事

大貌列顚國領事

エブル、エ、ジガウル

荷蘭國副領事

ウヰ、イー、ピストリユス

米、利堅合衆國領事

兵庫在留領事

ゼ、スユット、ステワルト

荷蘭國領事

アイー、ボートイン

佛蘭西國副領事

ユージン、ダロス

荷蘭國副領事

ウヰセー、コルトハルス

丁抹國副領事

エッチパラノ

大貌列顚國代辨副領事

ゼ、ゼ、エンスリー

獨逸北部聯邦領事代

ヱ、イウルス

伊太利國領事代

ヱッチ、ゼ、グルース

長崎在留領事

米利堅合衆國領事

ダフリユ、ピ、マンゴム

荷蘭國領事

ヱ、ビトムブリンク

魯西亞國領事

フキリツペウス

佛蘭西國領事

リヨン、ヂユリー

葡萄牙國領事

ゼー、ロレーロ

獨逸北部聯邦領事

アル、リンドウ

瑞西聯邦領事

ユ、ピ、ドムブリンク

丁抹國領事

エッチ、チッフ

大貌列顚國代辨領事

エ、ユ、エン子スリー

墺地利國領事　大貌列顚國代辨領事ヨリ兼帶

箱館在留領事

大貌列顚國領事

アル、エースデン

獨逸北部聯邦領事

シ、ガルト子ル

丁抹國領事

ゼエッチ、ヂュース

米利堅合衆國領事

イ、イ、ライス

魯西亞國代辨領事

エス、タラフテンベルク

佛蘭西國領事代

ゼ　エッチ、チュース

墺地利國領事　大貌列顛國領事ヨリ兼帶

新潟在留領事

大貌列顛國領事

ゼームス、ツループ

獨逸北部聯邦領事

丑、テ、ライス子ル

當時不在ウエーブル代任

荷蘭國副領事

メース

外務省日誌

明治三年庚午第壹號 自正月元日至八日

正月元日　洋曆一千八百七十年第二月一日

○大貌列顯國公使ノ來翰

以書翰致啓上候然バ今日貴國新年ニ當リ候ニ付閣下ノ手ヲ經テ貴政府　祝詞申入候隨テ拙者兩國交際追年倍懇親ナラン事ヲ深ク希望致シ候且貴國ノ政治開化ニ赴キ國内ノ政令一途ニ歸シ彌盛大國礎確乎タル事是亦期望スル処ニ御座候拜具謹言

西洋千八百七十年第二月一日即チ貴國
庚午正月元日
大貌列顯國特派全權公使
サアハルリーパークス
澤卿
寺嶋大輔
閣下
他各國公使ヨリモ同シク祝詞ヲ出ス今略之
二日

○佛蘭西國書史ノ來翰（此逐輸本月八日ニ在）
以手紙奉啓上候然ハ今般コント、デモンテベロ氏歸國致シ候間拙者儀當分之内公使館第一等書史之職被任候右之段可得御意如此御座候謹言
佛蘭西國公使館
第一等書史
第二月二日（我正月二日）
コンーテベアル
澤卿
寺嶋大輔

閣下

○丁抹國領事ノ來翰（此返翰本月十日ニ在）

瑞西聯邦總領事先頃東京ニテ役宅トシテ占有セシ宿寺ヲ再ビ同氏ヘ貸渡サレシ由ヲ聞キ及ヒタリ條約面ニ他ノ條約各國ニ許スヿハ我政府ニモ同樣許スベキヲ載タレバ余我政府ニ代リ當今瑞西聯邦總領事ニテ占有スルト同樣ノ振合ニテ貸渡サレンヿヲ閣下ニ請フ余ガ請求ノ至當ナルヲ閣下知リ給フヿ且萬國普通ノ禮讓ニ於テ貴政府ノ取扱ヒ瑞西聯邦政府ト丁抹國政府ト別ニ異ナルヿナキヲ疑ハサルベシ序ナガラ新年ノ嘉儀ヲ閣下ニ賀ス且速ニ回答アランヿヲ待ツ謹言

千八百七十年第二月二日　神奈川丁抹國總領事館ニ於テ

丁抹國總領事

エドワルド、バウヤール

寺島大輔

三日

閣下

○獨逸北部聯邦公使上総國木更津ニ往キ雨日滯在ス

四日

○政始メ今日ヨリ官員一同出省事務ヲ執ル卿大輔參朝於御前言上アリ左ノ如シ

御維新以來纔ニ二春秋ト雖ヒ制度百端略整頓ニ至リ聖政遐邇ニ洽シ萬國殊ニ御成功ノ速ナルニ感伏シ候ニ付テハ從是益皇威八紘ニ光被シ教化四陲ニ充溢シ百辟卿士ヨリ以テ庶人ニ至ル迄同心戮力以テ

皇國ヲ保護セン丁ヲ臣等謹テ外務ノ職ヲ奉シテ仰望スル処ナリ

外務卿　臣清原宣嘉

外務大輔臣藤原宗則

六日

○米利堅合衆國公使ヘ往輸（此復輸本月九日並十二日ニ在）

以手紙致啓上候然ハ東京ト横濱トノ間ニ鉄道取設ノ儀ニ付我慶應三年丁卯十二月廿三日小笠原壹岐トボルトメン氏約定取結候趣ヲ以テ右取建方ニ付舊年中同氏ヨリ屢書輸

被差出候処右ハ何様約束ハ有之候共當時差
支筋不少候間断リ及ヒ置候然ル処閣下御渡
來ノ後猶御來書ニ付其節回答ニ及ヒ置候通
リ舊幕ノ節外國事務取扱候者共且舊將軍德
川慶喜ヘモ相尋候ヘ共何レモ前書約束致候
顛末ハ更ニ相心得不申趣ニ候抑德川慶喜ハ
慶應三年卯十月政權奉還シ其節同氏ヨリ各
國公使ヘ書翰ヲ以テ及報知置候間右之趣ハ
先公使ヨリ引継有之候儀ト存候就テハ其後
内外ノ事務ハ一般ニ政府ニ歸シ候処右約定

ハ同年十二月廿三日則政權返上ノ遙カ後ニ
テ小笠原壹岐獨断ヲ以テ約定ニ及候ヘハ余
我政府ニ於テ採用可致謂レ無之候右ニ付一
昨年十月貴國先公使ヘ相達候書面寫並靜岡
藩ヨリ屆出候書面寫共二通御目ニ懸候右ニ
テ委細御了解可相成儀ト存候為御断此段可
得御意如此御座候以上

明治三年庚午正月六日　寺嶋大輔

澤卿

米利堅合衆國辦理公使

チャーレス、イ、テロング

閣下

別紙略之

○大貌列顛國公使ノ復輸

去月十五日附ノ御書輸落手然ハ越後國米鮮少ノ由無據場合ニ由テ貴國中他ノ港ヘ米輸出之儀ヲ禁シ且新潟表ニ於テ右樣布告致シ候節ヨリ二ケ月後ハ米ノ輸出ヲ相止候儀御申越ノ趣承知致シ候御申越之次第モ有之新潟ヨリ貴國中化ノ港ヘ米輸出一時禁制相立候儀拙者ニ於テ異存無之候乍去右禁制ノ儀ハ輸出差支無之節ニ至リ候ハヽ相廢シ申度候且又右禁制ハ貴國人外國人之無差別何レヘモ關係致シ候事ニ候將又右禁制中ハ貴國人外國人ニ不拘一体ニ御差許無之候ハヽ拙者義承諾致シ候右之通新潟領事ヘモ相達申候此段可得御意如斯御座候以上

大貌列顛國特派全權公使

午正月六日　サヽハルリーパークス

澤　卿

10 20 (Y H 特製)

寺嶋大輔

閣下

八日

○静岡藩士族田邊太一任外務少丞

○本日大貌列顕國書史アダムス木省ヘ參リ伊達民部卿澤外務卿ヘ面會同氏日昨年中貴國内養蚕場所ヲ經歷セシニ卵紙ヲ製スヘキ蚕ノ内繭殼内ニアリテ蛾蝶ニ化スルニ至ラスシテ蛆虫ニ化シ腐壞スルモノ間々有之由ヲ聞ク因テ横濱在留ノ外國人若心經驗シ殊ニ

伊太利人ノ剖試驗明セシ説ニ據ルニ此蛆虫ヲ初メニ殺夷セスシテ其儘取棄ルニヨリ其蛆遂ニ化メ蠅トナリ新蚕生成ノ際ニ至リ其蠅ノ螫毒ヲ受ケ又腐壞シテ蛆ト成ルニ至リ逐年孳殖害アルヿ少カラス凡蚕ニ斑點アルモノ是皆蠅毒ノ然ル処ナリ今蚕ヲ養フニ絲ヲ取ルト種ヲ取ルトノ二樣アリ故ニ其斑點アルモノハ早ク是ヲ煮テ糸ヲ取リ然ラサルモノヲ揀別メ卵紙ニ製セハ其毒ヲ絶ツヘシ因テ其方ヲ詳記シ世人ニ公布センヿヲ希フ

旨ヲ述フ

○大貌列顛國公使館ヘ往翰此復翰本月廿一日ニ在

以手紙致啓上候然ハ貴國ホールル氏並ニテー
メリク氏同道ニテ客歳十二月廿三日淺草遊
覽ニ被相越歸路薄暮ニ至リ芝増上寺大門前
通リニ於テテーメリク氏乗馬ニテ肯人良昇
ニ行當リ候処良昇即チ打倒レ候折柄腰ノ邊
ヨリ足ヘ掛ケ馬蹄ニカヽリ候哉痛ミ強ク且
足サキ少々打切候故附添之者早速手當致シ
療養差加ヘ候ヘ共未タ痛ミ有之歩行不相叶

全快ノ程モ難計難澁ノ趣當省ヘ愁訴歎願申
出候ニ付官員ヲ見分トシテ遣シ候處歎願之
次第モ相違無之右之痛所ニテ打臥居候旨見
分之者罷歸リ申出候左スレハ按摩渡世ニテ
生活ヲ立妻子迄モ扶助致シ居ル事ニ候ヘハ
今日ノ生活ニ差支候儀尤憫然之事ニ候間右
御憐察當人ハ勿論妻子迄ノ養育方手當等テ
メリク氏ヨリ差出被遣候テ可然間内々貴
下迄申進候條御取扱有之度此段可得御意如
斯御座候以上

明治三庚午年正月八日　外務大少丞

大貌列顛國公使館士官

アストン

貴下

○佛蘭西國書史ヘ返翰

御手紙落手然ハ貴下御儀今般コント、デ、モン

テベロ氏歸國被致候ニ付當分ノ内公使館第

一等書史御奉職ノ趣御吹聽承知致シ候爾來

彼是御厚意ニ可預右回答如斯御座候以上

明治三庚午年正月八日　寺嶋大輔

佛蘭西國公使館

澤　卿

第一等書史

コントデベアル

貴下

○各國公使領事ヘ往翰

以手紙致啓上候然ハ房州野嶋ケ崎ヘ建築ノ

燈明臺落成致シ此程ヨリ點火致シ候ニ付別

紙布告文五通差進申候間我國各港在留貴國

人民ヘ御布告相成候樣致シ度此段可得御意

如斯御座候以上

明治三年庚午正月八日　寺嶋大輔

澤　卿

大貌列顯國

佛蘭西國　公使

米利堅合衆國　閣下

獨逸北部聯邦

右各通

右同文言

外務大少丞

荷蘭國

魯西亞國

葡萄牙國

瑞西聯邦

白耳義國　領事

伊太利國　貴下

丁抹國

墺地利國

右各通

○別紙

航海者ヘノ布告

千八百七十年第一月二十二日ヨリ布良岬妻良ノ東ニ當ル野嶋ニ燈明ヲ點ス

北緯　三十四度五十三分二十秒

東經　百三十九度五十一分三十秒

燈明臺ノ裝置ハ第一等ノモノニシテ其場所ニ固定シ返照スベキ者也

光明ハ三方ニ輝キ又其邊ノ海上ニ普ク達スル也

燈光ハ英法二十里ノ距離ヨリ見ルヘシ燈籠ハ白色ニ塗リ之ヲ稜頭之頂上ニ裝置ス

燈光ハ滿潮線ノ上百三十三尺ノ處ニアリ

右妻良ノ岸ハ右燈明臺ヨリ南ノ方八十五度西ニ當リ其距離ハ英法四里十リ

假ニ設ケシ燈明臺ハ同日ヨリ點火スル事ナシ

千八百七十年第一月廿一日

大日本政府ノ命ニヨリ

横須賀製鉄所ノ長

シヽチボジール

10 30 (Y H 特製)

外務省日誌　明治三年庚午第二號（自正月九日至十四日）

正月九日　洋暦千八百七十年第二月九日

○米利堅合衆國公使ノ復翰

本月六日附尊書別紙共落手致シ候然者御申越ノ趣右譯文ヲ得タル上ニテ回答可致候ヘ共右文体ヲ見テ大ヒニ驚愕致候旨先ツ不取敢報告致シ候前大君政權ヲ天皇陛下ヘ奉還セシ旨ヲ閣老ノ手ヲ經テ外國公使等ヘ報知サレシ事相違無之候然レ共

伏見ニテ戰爭有シ頃大坂ニテ外國公使ト頻リニ諸公務ヲ引合セシ大君ノ士官ニテ引續取扱シ吏判然ノ儀ニ有之候

宸翰之日附ハ翌年正月十日ニシテ其書ニ大印ヲ鈐シ政務

天皇陛下ノ親裁ニ歸セシ旨ヲ外國公使等ヘ告知有之候其日迄前大君政府ノ處置ハ都テ確固タルモノトセリ又大君過去ノ事ハ心得ズ又想像シ能ハザルトノ趣ハ敢テ拙者ノ辨解ヲ得ズシテ瞭然ノ儀ト存候御來示ノ如ク

前老中小笠原壹岐ポルトメン氏ニ與ヘシ鉄道免許ノ一件ヲ獨斷ニテ取計ヒシトノ趣ヲ今日ニ至リ論スル事甚タ不正ニ屬スルヲ以テ今敢テ之ヲ辨解可致候千八百六十六年第六月廿五日ノ約書ハ貴政府ニ代リ閣老水野和泉守一人ニテ調印セシモノニ有之候且其節別ニ委任狀ハ無之候然レ共右長官ノ其威權有ヤ否ヲ其事ニ關係スル政府又ハ公使ニテモ論ズル事ナク信ジ罷在候附テハ閣下ヘ既ニ報ゼシ如ク右鉄道免許一件ヲ去月廿三

日出帆ノ飛脚船ニテ我政府ヘ申遣シ置候ヘハ貴政府ニテ合衆國ト交際ノ永續セン事ヲ名義ノミナラズ誠實重ゼラルル趣ヲ表スル樣此一件御處置有之度其旨次便ニテ我政府ヘ報ジ得ルニ於テハ拙者欣喜可致候以上

千八百七十年第二月九日

在大日本合衆國公使館ニ於テ

横濱

米利堅合衆國辨理公使

チャルレス、イ、デ、ロング

寺嶋大輔

閣下

○大貌列顛國公使ノ來翰

我王子ジュリク、ヲフ、イジンボルグ兵庫大坂オヨビ長崎ニユキシ次第ヲ委細外務總裁ニ報ゼシニ其港ニテ王子ニ對シ貴國長官ノ接待方ニ付大貌列顛國政府ノ謝辭ヲ貴政府ニ可述ヲ外務總裁ヨリ余ニ命ジ越シタリ依テ右長官等丁寧ノ取扱方ニ付大貌列顛國政府ノ謝辭ヲ貴政府ニ轉告有ラン事ヲ閣下ニ願フ

敬白

千八百七十年第二月九日

横濱

大貌列顛國特派全權公使

サヲ、ハルリ、パークス

澤卿

寺嶋大輔

閣下

○同上附文

我王子ジュークヲスイジンボルグ先達テ貴國

ニ渡來ノ節接待方ニ付

大貌列顛國皇帝陛下

天皇陛下ヘ感謝スルタメ

皇帝陛下ノ命ニ因リ認メタル外務總裁イ

ルヲスクラレンドンノ書翰ノ寫ヲ閣下ニ呈

スル事余ニ於テ大ニ欣喜スル処ナリ此書翰

ヲ

天覽ニ備ヘ給ハン事ヲ閣下ニ願フ事余カ職

掌タリ王子ニ對シ懇篤ノ接待方

大貌列顛國皇帝陛下ニ於テ深ク滿足セシヲ

天皇陛下是ニテ知リ給フベシ

右書輪中ニ記載セル如ク大貌列顛國政府貴國ニ於テ王子接待方ノ報ヲ得テ滿足セシ旨ヲモ閣下ニ報ス其事ヲ我國政府ニ告知スル事余カ職掌タリシ也敬白

千八百七十年第二月九日

横濱

大貌列顛國特派全權公使

澤　卿

サアハルリー、パークス

寺嶋大輔

右書輪ニ添閣下ヲ大貌列顛國外務總裁ヨリ在留公使ヘ來書ノ寫

先日ジューダフ、イジンボルク貴國ニ渡來ノ節接待方ニ付

大貌列顛國皇帝陛下ノ謝詞ヲ

天皇陛下ヘ述フベキヲ

皇帝陛下余ニ命シタリ

皇帝陛下右接待方ノ次第ヲ委細聞キ喜悅ニ堪ス貴國ニ渡來シ

天皇陛下ニテ懇篤ノ接待アリシニ因リ交際
彌厚カランヿヲ信ス、
此書翰ノ寫シヲ外務卿ヘ差出スベキヲ足下
ニ命ス將又大貌列顯國政府此事ニ付報知ヲ
得テ滿足セシ旨ヲ外務卿ニ告ケンヿヲ余足
下ニ願フ謹言

クラレンドン手記

シルヽハルリー、エス、パークス、ケ、シビヘ

○佛蘭西國公使ヘ返翰（此復翰三月十九日ニ在）

貴國第一月十二日附御書翰落手然ハ先般箱
館表ニ屯集致シ候我賊徒ニ與シ候貴國人ブ
ルュ子ー氏貴政府ニ於テ御裁判有之候趣承知
致シ候御書中「ノン、アクテイウヰテイー」トハ何樣ノ
刑法ニ候哉委シク御注解御申越有之度且其
他ノ數人御罰シ方御示無之右ノ次第柄ヲモ
承知致シ度此段可得御意如此御座候以上

明治三年庚午正月九日　寺嶋大輔

澤卿

佛蘭西國全權公使

マキシムウートレー

閣下

十日

○佛蘭西國書史ヘ往輪

以手紙致啓上然バ高尾恭次郎儀貴國軍艦「アスビツク」船ヘ乗組ミ測量ノタメ出張致シ居候處未タ御用濟ニハ不相成候ヘ共同船々將ヨリハ其下知狀ニ基キ同人儀昨冬寒冱ノ時節為相休當午正月廿日ヨリ又々出張候樣申含メ置候趣ニ候ヘ共同人儀ハ差支モ有之候ニ付右代リトシテ日下敬三ト申者「アスビツク」船ヘ乗組ミトシテ差出シ候間船將ヘモ御通達有之度此段可得御意如斯御坐候以上

明治三庚午年正月十日　外務大少丞

佛蘭西國公使館

書史

コント、デベアル

貴下

○丁抹國領事ヘ返輪

貴國第二月二日附ノ御書簡ヲ以テ瑞西聯邦總領事ヘ東京ニ於テ再ヒ宿寺ヲ貸渡シ候趣

云々御申越ノ處右ハ何等ノ御聞違ヒニ候哉
右樣ノ儀更ニ無之昨年中瑞西聯邦領事引拂
後大貌列顛國公使館附ノ官員ヘ貸渡シ當今
住居イタシ候儀ニテ別ニ仔細無之候間御疑
惑御氷解有之度且新年御祝シ被下忝存候右
回報可得御意如斯御座候以上

明治三庚午年正月八日　外務大少丞

貴下

丁抹國總領事

イ、バビール

10 20 (Y日本製)

十一日

○伊太利國領事ノ復輸

貴國舊年十二月九日附并ニ同月十五日附ノ
御兩書正ニ致落手候然者貴政府ニ於テ新潟
港ヨリ米輸出之儀御制禁相成候趣云々御申
越致承知候右御報旁此段申入候以上

千八百七十年第二月十一日

横濱

伊太利國公使館事務代理

シロベーチ

澤　卿

寺嶋大輔

閣下

十二日

○米利堅合衆國公使ノ復翰

以手紙致啓上候然者當公使館附ポルトメン氏ノ撰舉スル者ノ為メ東京ト横濱トノ間ニ鐵道ヲ築造シ之ヲ用フヘキ免許ヲ前將軍政府ニテ同氏ニ與ヘラレシ事ニ付別紙ヲ添ヘ御差越ノ尊書致落手候旨當月九日附書翰ヲ

以テ既ニ申入置候其後貴翰ノ譯文ヲ得タレハ此一件ヲ貴政府ニ報セシタメ尚明瞭ニ閣下ニ致告述候就テハ今茲ニ述ル事實及ヒ趣意ヲ尊考ノ為メ懇ニ貴政府ニ轉告有之度存候御申越ノ趣ニテハ貴翰ニ添ヘラレシ別紙二通ノ内一通ハ將軍政權ヲ朝廷ヘ奉還セシ旨ヲ慶應三年十月中（西洋千八百六十七年第十一月）舊政府ヨリ外國公使等ニ告知スル書翰ノ寫ナル旨ニ候ヘ共右寫ハ全ク正シキモノナラザレ共右正否ヲ論ズル事無益ニ屬スルヲ以テ今

他ノ一通ノ事ヲ論スベシ右ハ駿河即チ靜岡ノ下等ニシテ姓名ノ知レザル人ヨリ御紀問ニ應シ申出タル返答ニ有之其趣ニテハ前將軍ハ右鐵道免許ノ事ハ更ニ知ラサル趣ナレ共閣下ニ宛タル當月九日附書翰中ニ申述シ如ク前將軍過去ノ事ハ想像セズ又想像スルヿヲ欲セザルハ敢テ拙者ノ辨解スルニ及バサル一事タリ閣下過去ノ事ニ付舊政府ノ士官ヲ重子テ糾サルヽ事アリ共其士官等更ニ知ラサル旨ノ返答ヲ爲スノミナルベシ如何

トナレバ若シ彼等承知シアル趣ク答タランニハ吟味ヲ受ケ貴政府ニテ彼等ニ天ナル不都合ヲ與ヘ然ラザレバ之ヲ罪シ苛酷ノ處置ヲ受ル故ニ有之候老中即チ執政ヨリノ書翰ヲ以テ前文ニ述ル如ク政權ヲ奉還セシ旨ヲ說明セシハ慶應三年十月中（西洋千八百六十七年第十一月）ニ在リシ事偽リナシ其後凡二ケ月ヲ經テ同年十二月中ヨリ老中右鐵道免狀ニ調印シ渡サレタリ然ラハ其主長タル將軍既ニ政權ヲ奉還セシ故右老中ハ右免狀ヲ渡スヘキ處權

ナカリシ旨ヲ御返書中ニ述ベラレタリ翌年
正月十日（西洋千八百六十三年第三月三日）貴國ノ大印ヲ押シ
タル書翰中ニ
天皇陛下其節貴國政權ハ親裁ニ歸シ且政府
ノ契約ハ都テ
天皇陛下ニテ御引受ノ趣外國公使等ニ御告
知有之候事ハ必ラス閣下ニモ御承知ノ儀ニ
可有之存候則其書翰ハ當公使館ニ書留メ有
之候右終リノ日附即チ千八百六十八年第二
月迄ニ結定セル舊政府ノ條約書公ケノ契
約ハ都テ
天皇陛下ノ政府ニテ引受ケ果スヘキモノト
相成申候則右鐵道免許ハ其契約ノ一ニ可有
之存候　其節老中威權ヲ有セサルトノ趣ハ
向後他ノ契約ヲ打消ス比例ト為スヘキ御趣
意ト存候譬ハ東京ノ約書ハ老中即チ執政水
野和泉守調印セシモノナレ共前條ノ如ク一
度比例トナル時ハ貴政府ニテ恐クハ此後其
約書モ亦確實ナラザルモノト言ハルベシ如
何トナレバ千八百六十五年第十一月　天皇

陛下舊政府ノ老中阿部豐後守松前伊豆守ノ
兩名ヲ退職セシメタレバナリ右處置ヲ以テ
觀レハ
天皇陛下既ニ千八百六十五年ニ大權ヲ執リ
給ヒタレヒ政權ハ將軍ニ委托シアル事ヲ常
ニ信シ罷在候且千八百六十八年第二月附ノ
宸翰ハ其日附迄ハ舊政府ノ處置都テ正當確
實タルヲ充分證スルニ足ルヘキモノナリ其
年内即チ千八百六十八年貴國ニ内乱起リシ
ヨリ徐々ニ貴政府ヲ建立アリシ故何等ノ處

置ヲモ為シ難カリシナリ故ニ千八百六十九
年ノ始迄其儘ニ打捨有之其頃貴國外國官知
事東久世殿ノ手ニ右免狀ノ原書ヲ差出シ其
寫ヲ同氏ヘ相渡置申候故ニ此一件ハ貴政府
ニテ去歳中既ニ考究シ是迄當公使館ト屢書
翰ノ往復モ有之候閣下舊政府外務局ノ書類
ヲ探索セラルヽニ十分ノ時間有之候ヘハ右
免許アリシ事ハ顯然ノ儀ト存候舊政府ニモ
承知ノ上前老中小笠原壹岐守ヨリ右鉄道免
狀ヲ渡セシ事ナレハ閣下ニ於テモ曾テ之ヲ

打消ス支ナク書翰ニテ此免許ノ確實タル事
ヲ申述ラレ尚外務省ニテ過日面晤ノ節ニモ
同様ニ有之候其節他ノ事ト取替ント閣下申
述ラレタレ共拙者承知不致候閣下此肝要ナ
ル一件ニ付先役ト面晤ノ節別段異論モ無之
處若右免許ノ事ニ付大ニ異存アルカ又ハソ
レヲ改メント欲セラレシナランニハ閣下容
易ニ其趣ヲ申述ラレシナラン然ルニ閣下右
免許ヲ確實タルモノトセス又ソレヲ廢物ト
スヘキ趣突然告ラルヽ事甚不思議ノ事ニ存

候ポルトメン氏ハ神奈川條約ヲ取結ヒシ時
今ヲ去ル事既ニ十七ケ年前合衆國ト貴國ト
ノ條約結定以來當公使館ニ連綿勤仕罷在候
ヲヲ御熟考有之貴政府ニ御建言有之度存候
抑ポルトメン氏ハ利益ヲ貪ルベキ者ニ非サ
レバ通常利ニ走ルカ如キ愁訴人ノ類ニアラ
ス同氏ノ申立ハ假令確證無之共我國政府ニ
テナホザル事ナカルベシ然リト雖モ同氏申
立シ廉ハ拙者ニ於テ全ク承諾保證セルモノ
ナレハ可然モノトシテ我政府ニテ必ス採用

可致存候如是承諾保證セシ事件ハ通常ノ禮
讓ニ於テ閣下ノ返書中ニ陳述アリシ如ク貴
政府ニテ右樣手輕ニ御斷相成候筋ハ有之間
敷存候面晤及ヒ書翰ニテ既ニ閣下ニ告述セ
シ如ク我國政府ニテ捨置カザル如是肝要ナ
ル事件ヲ貴政府ノタメニ閣下如此手輕ノ處
置ヲ以テ夫ヲ廢シ取纏リ候事ト被相考候哉
是迄貴政府ノ契約ヲ決シテ打消ス事ナク都
テソレヲ保守シ突然今廢物トスル旨ヲ報ス
ル事

天皇陛下ノ大權ト被思候哉右ノ如キ處置ア
リシ後ハ貴國ニテ結ヘル公ケノ約定及ヒ保
證ハ如何シテ信スヘキヤ又向後鎖港論ヲ唱
ヘザル旨何ヲ以テ請合ルヽ哉右鎖港論ニテ
舊幕ヲ崩潰シ閣下其權ヲ握リテ後條約其他
ノ契約ヲ都テ廢物トセンヿヲ企ツルハ如何
ナル事ナルヤ先日モ申述ヘシ如ク鉄道築造
卒業ノ後ハ貴國人而已ニテソレヲ用フル免
許ノ儀ハ不苦其積ニテ用意罷在候右至要ナ
ル一ケ條ヲ省キ可申閣下ノ異論アル廉ハ全

ク右一事ニ可有之存候然レ共貴政府ニテ拙
者ト至當ナル取極メヲ為サン事ヲ強テ拒マ
ルヽニ於テハ元來ノ素志ニ基キ右免許ヲ果
サン事ヲ相迫リ可申候貴政府ノ確固タル契
約ヲ果ス事ヲ拒マルヽヲ擧テ算ルニ暇アラ
ザル多クノ次第ヲ以テ拙者之ヲ論破スル事
却テ閣下ノ益ナルベシ閣下右契約ヲ果スカ
然ラザレハソレヲ拒ムニ付其事ヲ引受ルカ
必ズ兩樣ノ内ニ出ヅ閣下右兩樣ノ内何レヲ
望マルヽヤ閣下ニ御尋申候附テハ此書翰ノ

日附ヨリ十日ノ内ニ此一件御回答無之時ハ
貴政府ニテ引受ケシ確固タル契約ヲ廢物ト
スル事ニ治定セシ事トナシ其趣ヲ我政府ヘ
申立此一件ニ付指圖ヲ受ケ且合衆國民等ノ
タメニ右違約ノ償金ヲ求ル權ヲ受ヘシ右人
民ハ免狀ノ旨趣ニ基キ鐵道築造ノタメ撰擧
ヲ受ケシモノ共ニシテ若シ欺カレシ時ハ速
ニ十分滿足スヘキ處置ヲ受ケ且其者共ノ正
理ニ付其政府ノ守護ヲ受クヘキ者ニ有之候
右貴答如斯御座候以上

千八百七十年第二月十二日

在大日本合衆國公使館ニ於テ

横濱

米利堅合衆國辨理公使

チヤーレス、イ、デロング

澤　卿

寺嶋大輔

閣下

十三日

○佛蘭西國書史ヘ往翰

以手紙致啓上候然ハ御同僚ジブスケ氏築地中通リ稲葉金之丞上ケ邸ノ内御所望ニ付御貸渡ノ儀ハジブスケ氏自己ノ屋敷ト相成候テハ不都合モ有之候間貴國公使館出張所トナシ御貸渡申候儀差支無之候間右ニテ可然候ハヽ御請求ニ可應候此段可得御意如此御座候以上

明治三年庚午正月十三日　外務大少丞

佛蘭西國

公使館書史

コントデベアル

貴下

○佛蘭西國公使ノ復翰

東京ニ於テ公使館書史ジブスケヘ御貸渡シ
相成居候地所ノ儀佛蘭西國公使館用ノ建物
并ニ地所ノ名ヲ以テ借請候儀佛蘭西國公使
致承諾候尤地代其外ノ儀ハジブスケ引請可
申候右可得御意如此御座候以上

佛蘭西國公使館ニ於テ

千八百七十年第二月十三日

10 20 (Y H 特製)

佛蘭西國公使館書史

コントデベアル

外務大少丞

貴下

十四日

○大貌列顛國公使ヘ返翰

貴國千八百七十年第二月九日附ノ御書簡披
閲然ハ貴國皇子ジュクーク、ヲフ、イジンボルク
殿下昨年中我國ヘ御貴臨ノ節第接待方ノ義ニ
付懇篤ノ御謝詞御申越且外務總裁イールヲ

スクラレンドン閣下ヨリ感謝ノ御書簡寫シ
被差遣一覽夫是御厚禮ノ趣却テ慚愧不堪早
速我
天皇陛下ヘ奏聞可致候左候ハヽ來示ノ通り
彌將來ノ交誼親睦不淺事ト致信用候此旨貴
政府ヘモ可然御建言有之度此段回答可得御
意如斯御座候以上
明治三年庚午正月十四日　寺嶋大輔
澤　卿
大貌列顯國特派全權公使

サヽハルリ、パークス
閣下

○米利堅合衆國留學生學費ノ儀ニ付辨官ヘ伺
書
亞米利加留學生ノ儀昨年來一人一箇年ニ付
學費六百ドルツヽ被下置候處右ハ彼國ニテ
諸生世話致シ候ヘリスト申者ヨリ「アナポリ
ス」地名ノ學校ニ入門致シ候ヘハ五百ドルニテ
相濟候趣申越候ヘ共夫ノミニテハ不足ニモ
可有之ト省中評議ニ及ヒ更ニ百ドルヲ加ヘ

六百ドル被下置候義ニ有之候然ル處書生中
ヨリ書面ヲ以テ申立且此節諸藩ヨリ渡海イ
タシ居候者ノ内一人歸朝委細承リ候ヘハ
最初米人ヘリスヨリ申越候入費ハ十月ヨリ
翌年四月迄大學校開業中ノ間ノ學費五百ド
ルト申儀ヲ一年中ノ入費ト存シ前文ノ通リ
宛行ニ相成候ヘ共別紙ノ通リニテ年中衣服
料并ニ五箇月休暇間ノ活計料ハ全ク不足ニ
相及ヒ候ニ付猶御熟評ノ上學費増加有之度
此段奉伺候也

正月十四日　外務省

辨官
御中

別紙

一五百ドル　七箇月之間學校寄宿料並學費
一百五十ドル　年中衣服其外凡入用
一三百五十ドル　五箇月之間家賃食料共
合千ドル

外務省日誌　明治三年庚午第三號　自正月十四日至廿日

正月十四日

○米利堅合衆國公使ノ來翰（此返翰本月廿二日ニ在）

以手紙致啓上候然ハ三乙島ニ在ル貴國人ノ事ヲ探索セン為メ其地ニ被差遣候貴國使節ヨリ御承知相成候事情拙者ヘ御告示被下度此段御頼申候右可得貴意如斯御座候以上

千八百七十年第二月十四日

米利堅合衆國辨理公使

1020 (YH 等製)

澤　御

寺嶋大輔

閣下

チャルレス、イ、デ、ロング

○白耳義國領事ノ復翰（此返翰本月廿二日ニ在）

明治二年十二月九日並ニ十五日附御書簡并

ニ明治三年正月八日并ニ九日附御書簡共落

掌然ハ十二月十五日附御書簡ニ早速御報不

差出譯ハ反譯文相添無之折柄拙者通辨ノ者

不快ニテ暇遣シ置候ニ付右反譯為致候者無

之右故延引ニ及ヒ候次第ニ有之候右等ノ遲

延ヲ省キ候為メ閣下ヨリ拙者ヘ被遣候御書

翰ヘ可相成ハ佛語ニテ譯文御差添被下度奉

願候

去ル十二月二十九日附第一月四日并ニ十九

日附拙者書翰ニ御返書相待居候ヘ共于今御

報無之度々申上候通リ我白耳義ハ產物數多

ノ國ニテ貴國トノ條約モ外各國ト同樣ノ儀

ニ付當國ニテ製造等ニ御入用ノ諸品各國同

樣白耳義國ヨリ賣渡候理有之貴政府ニテモ

拙者名代相勤罷在候國へ御注文有之候ハヽ
格別ノ御益ニ可有之白耳義國ハ産物多キ地
ニ付隨テ諸品モ下直ニテ買入候事出來申候
加之殊ニ白耳義政府ノ意ハ兩國ノ間ニ貿易
ノ盛大ナラン事ヲ欲シ居候ニ付其意ニモ應
シ可申候我君主英國ニ旅行イタシ同所ノ各
地ニオイテ懇信ノ取扱ヲ受候趣ヲ載ル英國
新聞「ロンドンタイムス」差出候間御一覽可被
下候且又過日差出置候書輸ヘ早々御報有之
度右貴答如斯御座候以上

千八百七十年第二月十四日

白耳義國領事

エルスドロース

澤

御

閣下

○獨逸北部聯邦公使ノ來輸

以手紙致啓上候然ハ越後國新潟ヨリ米積出
シノ儀ニ付貴輸落手新潟ノ領事并各港在留
我國ノ領事及ヒ人民ニ對シ第二号ノ貴輸披
見ノ上拙者手紙ヲ以テ凡二箇月後即チ第三

月晦日後ハ新潟港ヨリ米積出シノ儀被禁候
旨申遣シ候右ノ趣ハ第一号貴翰ノ回答トシ
テ申述候將又第二号貴翰ノ回答不致ハ第一
號貴翰ノ約定違背ノ文言ヲ取直シ候譯ニ御
座候右可得貴意如斯御座候以上

第二月十五日

獨逸北部聯邦代理公使
ユム、フォン、ブラント

澤卿

寺嶋大輔

閣下

○仝 此逐翰本月廿八日ニ在

以手紙致啓上候然ハ我獨乙人貴國ノ小舟ヲ
借受他ノ船ヘ相越候節其小舟ノ水夫右獨乙
人ヲ水中ニ投込ントセシ所業ニ付當港在留
ノ我領事ヨリ同所判事ヘ訴出其事件既ニ落
着相成右水夫ヲ召捕ヘ且刑罰ニ處シ候事共
其取計方ニ就テハ拙者更ニ疑惑ヲ入レ候事
ニハ無之候ヘ共是迄右ニ類セシ事件モ度々
有之候事故以後右様ノ心得違無之様閣下ヨ

リ能々御心附有之候樣致度存候右ニ付閣下
ヘ左條ヲ陳述及ヒ候
波戸場ヨリ外國船ヘ往返ノ貴國小舟ハ何レ
モ西洋數字ヲ以テ銘印トナシ且水夫ニモ同
樣ナル番号ノ目標ヲ衣類ニ記シ候ハヽ自然
右樣ノ所業ハ相減シ可申且科人探索方ニモ
便利ト相成可申ト被存候此段得貴意度如此
御座候以上

第二月十五日

獨逸北部聯邦代理公使

エムフォンブラント

澤卿

寺嶋大輔

閣下

十九日

○大親列顛國公使ヘ往翰

以手紙致啓上候然ハ新潟表取締ノ義同所在
留貴國領事ヨリ被申越候趣ヲ以テ兼テ御來
示ノ次第モ有之候ニ付新發田藩ヨリ二小隊
差出シ此人數百三十人餘ニテ取締イタシ居

候儀ニ候且知縣事三條西正四位モ當分出張
イタシ居候右御答申入度如此御座候以上

明治三年庚午正月十九日

寺嶋大輔
澤卿

大貌列顛國特派全權公使
サアハルリ、パークス

閣下

○ 仝 此返輸三月四日ニ在

以手紙致啓上候然ハ別紙ノ通リ久保田藩ヨ
リ屆出候間為御心得不取敢差進申候此段得
貴意度如斯御座候以上

正月十九日

寺嶋大輔
澤卿

大貌列顛國特派全權公使
サアハルリ、パークス

閣下

○ 正月十九日附久保田藩屆別紙

去十二月十九日夜九ツ時沼田村沖合ニテ外
國船難破ニ及フ右乗込人數ノ内一人上陸ニ

10 20 Y日特製

付通辭ヲ以テ尋問左ノ通リ

一何國ニ候哉相尋候處大貌列顛國船ノ趣船名「ハブレイト」唱ヘ候由

一乗込人數幾人ニ候哉相尋候處船頭水主共十二人尤不殘外國人

内壹人　船頭

但シ無難ニテ上陸イタシ候

殘十壹人

内三人　瀬死ニテ竹生濱ヘ寄リ上リ申候

同壹人　右同断落合村濱ヘ寄リ上リ申候

同七人　瀬死イタシ候哉見ヘ不申候

但シ内壹人船頭女房ノ由

一此度何方ヨリ出帆致候哉相尋候處横濱出帆夫ヨリ箱館ヘ入津同處ニテ昆布五千九乾鳥賊二十箱鮭二十四本炭二百俵薪五百本右品々積入當十二月八日同所出帆致シ漢土「サンハイ」ヘ乗出シ候途中風難ニテ同十七日十八日兩日水澤沖ニテ碇止罷在候処翌十九日船底相痛ミ迚モ乗船致シ居候事不相叶ニ付元船乗捨乗込人數不殘「バッテイラ」ヘ乗移リ上

陸ノ心組ニテ參リ候處右「バッテイイ」大浪ニ
打込レ乘込人數散乱私壹人助命漸々當地ヘ
上陸イタシ跡人數ハ如何相成候哉難相分趣
ニ御座候

一右積入荷品ノ外何モ無之哉相尋候處英國ノ
「サフラン」四十箱洋銀四百五拾枚書物壹箱懐
中時計壹ツ船頭女房貯金洋銀拾枚當人懐中
致シ居候由外ニ着替品々有之由申聞候

但シ右品々流失イタシ候樣被考候間若シ
寄リ上リ候ハヽ其價遣シ候故返シ可給ト

ノ申條ニ御座候

寄リ上リ候死人如何取片付候心得ニ候哉相
尋候處其土地ヘ今明日中ニ土葬イタシ吳候
トノ申聞ニ御座候

一其許何方ヘ罷越申度哉相尋候處横濱迄ハ遠
方ノ事故箱館迄送リ可給同所大貌列顛國領
事方ヘ罷越同所ヨリ便船ヲ以テ横濱ヘ參リ
申度トノ申條ニ御座候

一寄リ上リ候「バッテイイ」ヲ如何イタシ度心得ニ
候哉相尋候處買人有之候ハヽ賣拂申度トノ

申聞ケニ御座候

一元船右同断相尋候處御當國ニテ拂ヒニ相成候モノナラバ世話イタシ呉候様申聞候

但シ右船二三丁程沖ニ相見エ候ヘ共浪高ニテ見分ケモ相成兼居申候

右ノ段々向能代村久吉ト申モノヽ通辭ヲ以テ問屋共立會聞取申候

一上陸ノ外國人落合村ヘ差置問屋ノ者附添取扱罷在申候死骸并ニ元船トモ當人見分致シ度趣故右取濟シノ上問屋ヘ引取リ取扱可為

致心得ニ罷在候

一食料ノ儀相尋候處内類等夫々注文ニ基キ聊無差支取扱罷在申候

一右上陸ノ外國人裸身同様ニテ上陸イタシソレ成リニ難見捨ニ付西洋衣類買調ヘ手當イタシ候

一箱館ヘ御仕送ノ御手配御指揮被下度當人附添ノ外只今ノ通辭ノ者被差遣候儀ニモ可有之哉御伺申上候

能代詰川方見廻役

巳十二月廿一日　高久良之助

○新潟局少属ヨリ届

去巳十一月廿六日羽州宮ノ浦海岸ヘ漂着イタシ候大貌列顛國蒸氣商船「ヲーシンクイン」船名乗組ノ内船主ホーメン外三十八人ヘ別紙役員附添同十二月廿日同所出立信州路旅行道中無滞昨十八日中山道蕨宿着今十九日東京府着仕候尚横濱在留同國領事ヘ引渡シ済ノ上ハ御届可申上候得共先此段申上置候以上

午正月十九日　新潟局

莊司少属

宮岡權少属

別紙略之

○伊太利國領事ノ來輸以手紙致啓上候去月廿一日東京ニテ御面晤ノ節申述置候生糸并ニ蚕卵紙商法記録致シ別紙差上申候將又横濱貴國商人共ヨリ貴政府ニ願書差出候哉且當年輸出ノ蚕卵紙多寡取極別段目印附ケ候一件ニ付政府ヨリ御下

命有之候哉否御報知有之度存候謹言

千八百七十年第二月十九日

横濱　伊太利國領事

寺嶋大輔　シロベーチ

閣下

○蚕卵紙商法記錄

過日御面晤ノ節御物語申上候蚕種商賣ノ儀ハ我國ノ為メニモ齊シク須要ナルハ閣下ニ

モ御承知ノ儀ニテ後來右商賣ノ盛ナランヲ欲シ猶又茲ニ左ノ趣拜告致シ候

今ヲ去ル既ニ六年前ヨリ我國ノ者共蚕種買入ノ為メ其代人ヲ貴國ニ遣ハセシヨリ共直段年々増進セリ

此五箇年ノ間最上ノ蠶種一枚ノ平均相場如左

千八百六十五年　壹元（ドラル）宛

同　六十六年　壹元六拾セント（セントハ一トルノ百分一ナリ）

同　六十七年　二元二十セント

同　六十八年　三元

同　六十九年　四元

横濱ノ貴國商人中ニテ向後一ツノ取極メヲナサント衆議スル由右取極メ彌行ハレナハ當年千八百七十年ハ直段六元ヨリ六元以上ニモ至ルヘシ右ノゴトキ不公平ノ仕方ニテ段々直段ヲ増ス時ハ我國蚕種ノ商人右買入レノ為メ貴國ニ來ルベキ哉或ハ他國ニ行クベキ哉此儀第一ノ疑問トナルナリ

10 20 YH 特製

右ハ今ノ如ク此後モ入用丈ノ蚕種ヲ伊太利ニテ産セザル時ヲ云フ

我國人右入用丈ノ高ヲ産センヿヲ欲ス

右ノ趣行ハルヽ時ハ我國ノ商賣一時ハ困却スルト雖モ其實ハ貴國ニテ眞ノ利益ヲ失ヘルナリ

左ニ説明スルハ繭ヲ以テ蚕卵ヲ製スルト生糸ヲ得ルトノ得失ヲ論スルモノ也

繭壹キロガラム（我二百四十目）ニ分五厘ヲ以テ蚕卵二ヲンス五分（一ヲンスハ一ポンドノ十六分ノ一ニシテ即チ我七文目五分ヲ得

ヘシ右ニヲンス五分ノ蠶卵ハ少ナクモ種紙三枚ヲ滿ツルニ足ルベキモノニシテ是生糸ヲ産スル國々ニテ實測シ通知スル処ナリ然レ共日本ニテハ蛆ヲ生ズレバ八分ノ一丈ケハ減ズヘケレハ其割合ニテ算定スルヲ要ス

註曰條約面ニ掲示スルゴトク六十キロガラム(百斤)ハ百斤ニ齊シ故ニ「一キロガラム」ハ一斤ト三分ノ二即チ二ポント五分ノ一ニ當ル

右割合ニテ十六キロガラム(凡二十七斤)ノ繭

(生糸一キロガラムヲ得ベキ高ハ蚕種四十八枚ヲ生ズベケレ共蛆トナル高ヲ六分ト積リテ二十枚ト定メ右直段一枚ニ付二元宛ト見レハ日本商人ノ得ル處ハ即チ四十元ナリ、

右十六キロガラムノ高ニテ生糸ヲ製スレバ一キロガラム丈ヲ得ベシ右生糸ハ極高價ニ積リ六十キロガラムニテ千元也然レハ日本商人ノ得ル丈ハ一キロガラムノ糸唯十六元六十六セントナルノミ則チ蚕卵ニテ賣却スル金高ト比較スレハ同高ノ繭ヲ以テ僅カニ

其半高ニモ至ラザル也

右ノ譯ナルユヘ蚕卵紙ニテ壹枚ニ付三元或ハ四元ニ賣レハ莫大ノ利益ナルハ辨論ヲ待タス然ルニ貴國商人壹枚ニ付六元ヨリ六元以上ニモ賣ラントスルハ何等ノ謂レナルヤ

右貴國商人ノ目論見實ニ行ハレナバ右商人ノ所為甚タ宜シカラズ右ノ如クシテ常ニ利益ヲ得ル事ハ出來難キノミナラス却テ之ガ為メ確實ナル大利益ヲ失フニ至ルベシ

伊太利ノ商人當年モ右ノ如キ大金ヲ費シテ蚕種ヲ買入ルベキ哉實ニ疑ヒヲ容レサルベカラス右ハ實ニ堪ガタキ高價ト云フベシ

貴國蚕種ノ價年々不相當ニ増進スル事ハ既ニ我國人ノ驚愕スル処ナレハ貴國ノ外別ニ生糸出産ノ地ヲ詮議スルニ至ルベシ其地ハ是迄人ノ知ラザル地也

近來亞細亞ノ中央「トルケスタン」地名ニテ「シルダリヤ」ト唱フル川ノ船圍ヒ場ノ邊ニ一區ノ地ヲ開ラキ魯西亞ヨリ免許ヲ得テ伊太利亞ノ商會其地ニ在留セリ之レ其地ニ産スル美

種ノ繭ヲ買ヒ蚕卵ヲ得ンガタメナリ又其商會ヨリ昨年（即チ八百六十九年）試ニ若干ノ蚕卵ヲ本國ニ送リタリ其數凡八萬枚ヲ算ス横濱新聞紙中蛆ノ事ニ付須要ナルアダムス氏ノ報告ヲ見タリ

註 日千八百七十年第一月廿九日附「ジヤツパンメール」ノ新聞紙名並ニ千八百七十年第一月附横濱商社惣代ノ報告書中ニ在リ

右アダムスノ報告書中ニ「生糸ノ漸々悪シクナリシ原由ノ一ハ最上ノ蚕卵多分ニ輸出スルニアリ」ト云ヘリ然レ共其論ハ至當ト云フベカラズ

次ノ表ハ此五年以來蚕種ノ外國ニ輸出セシ高ヲ示セルモノニシテ横濱商社惣代ノ告書中ニ載スルモノナリ

千八百六十五年	三百萬枚	
同 六十六年	九十五萬枚	
同 六十七年	八十五萬枚	
同 六十八年	二百三十萬枚	
同 六十九年	百三十九萬枚	

右ノ報ヲ以テ見レハ千八百六十八年ニ輸出スル蚕種紙ノ數ハ凡二百五十萬ニ近ク然ルニ同年貴國ヨリ輸出セシ生糸モ壹萬五千五百俵ニ至レリ右ハ千八百六十四年六十五年以來珍ラシキ多數ト云フベシ

千八百六十四年 生糸 壹萬六千五百二十三俵
同 六十五年 同 壹萬千六百十九俵
同 六十六年 同 壹萬三千五百六十四俵
同 六十七年 同 壹萬二千三百俵
同 六十八年 同 壹萬五千五百俵

右景況ヲ以テ察スレハ生糸輸出ノ數ハ強ガチ蚕種輸出ノ多少ニハ拘ラザルベシ右蚕種ノ儀ハ外國ヘ輸出ノタメ別段ノ産業トナレリ故ニ全ク別ノ事ニシテ貴國ニテ生糸ヲ自製スル蚕卵ニ決シテ差響ク事ナカルベシ都テ横濱ヘ輸送シ來ル蚕種ハ最上ノ品ト見エルモノモ別ニ賣買ノタメニ製セシモノナルハ貴國人外國人モ普ク知レル処ナリ又最上ノ品ト唱フルモノモ其實ハ然ラス歐羅巴ニテ生糸ヲ製スルモノ共實檢ノ上ニテ知レ

ル通リ多クハ良種ニアラザル也千八百六十八年ニハ貴國ヨリ輸出セシ蚕種ノ數甚タ夥多ナレ共生糸ノ輸出モ亦少ナシトセズ是上好ノ品ハ日本人自製ノ為メニ貯ヘ置タル確證トイフベシ右ノ外貴國商人常ニ貴國自用ノ蚕種ヲ取寄スル旨頻リニ口ニ唱フレ𪜈奥州信州ヨリ出ルモノハ甚タ些少ナリ又蚕種ヲ買入ルヽモノ日本ニ來ラザル前ハ武州甲州豆州信州近江常陸越後ニテハ決シテ賣却ノ為メ蚕種ヲ製セザリシナリ又上州ニテハ

催ニ製セシ也然ルニ近來其價ヒ騰貴セシニヨリ右國々ヨリ産出スル蚕種ノ高ハ外國ニ輸出スル惣高ノ三分一ニ下ラズ右國々ニテ製スル最上ノ品ト稱スルモノモ尋常一樣ノモノニテ殊ニ外國輸出ノ為メニ製シタルモノナリ

千八百六十七年ニアツテハ蛆ノ生ゼシ數多ク春子種ハ催ニ五十萬ニ過キズ其年ハ終ニ一枚ニ付價ヒ三兩二分迄ニ至レリ右ノ如キ高價ハ夫迄決シテ聞カザル処也右縁故ヲ尋

又ルニ日本ノ生糸ヲ製スルモノ共其所持ス
ル上好ノ種ヲ賣却セバ之ガ為メ自用ノ分ヲ
欠キ翌年ノ生産ニ甚タ不都合ナルヲ察シタ
ルヨリ起リシ事ト見エ右輸出ノ表ニ載スル
ゴトク千八百六十八年ニオイテハ蚕種モ生
糸モ甚タ多ク輸出シタルヲ以テ推考スレバ
日本ヨリ蚕種ヲ過度ニ輸出セシ事トモ謂ヒ
ガタク又最上ノ蠶種過多ニ出デタリトモ謂
ハレザルベシ是ヲ以テ生糸ノ悪シクナリシ
原由ハ右輸出ノ致ス處ナラザルヲ察スベシ

右可得貴意如此御座候以上

千八百七十年第二月十九日

伊太利國領事

シロベーチ

寺嶋大輔

閣下

二十日

○米利堅合衆國書史ヘ返翰

貴國第一月廿五日附之御書簡落手然者御止
宿所大松寺之儀ニ付御回答ノ趣委細承知イ

タシ候然ル處兼テ申進置候通リ因循被成置
候テハ寺院不都合ハ勿論我政府ニテモ手當
差遣シ方等夫是入費モ相掛リ候儀ニ付不得
止申進候次第ニ候處來示ノ趣無餘儀御情實
ニ付御見込ノ通リニテ不苦候ヘ共イマダ地
所等モ御決定不相成程ノ儀旁追テ御轉住迄
モ多少ノ時日ヲ經可申候間右邊御差含有之
我政府ニオイテ月々銷盡ノ入費高并寺院ノ
手當等外各國書記官借寺ノ例ニ習ヒ貴下ヨ
リ御差出相成候ハヽ先御希望ノ通リ取計可

申且大松寺ヘ月々金子御渡シ相成候趣ニ候
ヘ共同寺ニ於テハ聊請取候儀等無之旨申立
候彌御渡シニ相成候儀ニ候ハヽ右請取書御
遣シ可有之左候ハヽ右ヲ以テ疑ト申談候樣
可致候此段回答得御意度如斯御座候以上

明治三年午正月廿日

外務大丞

米利堅合衆國公使館書史

エルシー、ポルトメン

貴下

外務省日誌　明治三年庚午第四號　自正月廿一日　至廿八日

正月二十一日

○大貌列顛國書史ノ來翰以手紙致啓上候然ハ舊冬芝大門通リニ於テ

テ丨メリク氏按摩良昇ト申者ヲ馬蹄ニテ怪我致サセ候ニ付云々御申越ノ趣委細承知致シ候就テハ右同人ヨリ右手當金トシテ洋銀十枚差遣シ候間其御省ヨリ當人ヘ御渡方御取計被下度此段可得御意如斯御座候以上

大貌列顛國公使館書史

午正月二十一日　アストン

外務大少丞

貴下

○神奈川縣ノ來翰

一昨十九日夜第二字頃横濱居留地百七十四番佛蘭西國商人ガメン方ヘ同人雇小使春吉忍入右ガメンヲ起シ理不盡ニ携ヘ來リシ鉄ヲ以テ同人ヘ切リ掛數ヶ所疵為負猶右物音ニテ立出候同館賄方佛蘭西人トモ疵為負候

折柄右館内ニ居合セ候外國人共立出有合候西洋德利ノ碎片ヲ以テ右春吉ヘ投付候ニ付同人モ眼其外頭上等ヘ深疵受其儘悶絶シ候後當方ヘ為知來候間不取敢附屬ノ者差遣シ疵所等見分為致候處ガメンノ疵所ハ深手ニ候ヘ共命ニ障リ候程ノ儀ニハ無之賄方佛蘭西人ハ淺手ニテ左迄ノ事ニハ無之春吉ハ眼頭上其外疵所尤深手ニテ當方ヘ引取候頃ハ最早相果手當モ不行屆儀ニ有之右春吉儀ハ其節ヨリ二日程前ニ被雇候者ノ由ニテ何故

ニ前書ノ所業ニ及ヒ候哉不相分意趣遺恨有之仕成シ候儀ニモ可有之歟彼方察シニハガメン寢室ニ洋銀有之候間右ヲ奪掠セン為メニ忍入候處被見咎候故前書ノ擧動ニ及ビ候儀ニ可有之旨申聞候ヘ共當人共場ニテ相果候上ハ更ニ事柄不相分就テハ當方ニテモ同館近隣小使其外ノ者共迄夫々相糺引合ノ者モ差當リ無之候ヘ共檢使ノ者未ダ不罷歸候ニ付猶可申入候此上差テ手重ニ可相成儀トモ不存候ヘ共先此段申入置候也

10 20 (Y H 特製)

正月廿一日　神奈川縣

外務省

御中

廿二日

○米利堅合衆國公使ヘ返翰

貴國第二月十四日附ノ御書翰落手然ハ先般三乙嶋ヘ差遣シ候我士官ノ者ヨリ彼地ノ事情申越候ハヽ其顛末御承知被成度趣致承知候然ル處右士官三乙嶋ヘ着後ノ報知ハ未タ無之候ヘ共往路貴國「サンフランシスコ」ヘ着

ノ節同所官員并人民ヨリ懇切ノ待遇ヲ受候
旨等申越候貴國人不相替懇親ノ情ハ拙者共
ニモ深謝スル所ニ候尤着島以後事情等書通
有之候ハヽ可申進候此段回答如此御座候以
上

明治三年庚午正月廿二日　寺嶋大輔

澤卿

米利堅合衆國辨理公使
チャールス、イ、デロング

閣下

○佛蘭西國公使ノ來輸（此返輸本月廿五日ニ左）

以手紙致啓上候然ハ今般西班牙國政府ノ代
理公使ノ官位ニテヘブレヌロドリゲ、ジエ、ム
ノズト申者貴國ヘ到着ニ相成居候間閣下方
ヘ早々御報知申上候同人儀昨年貴政府ト相
結ヒ置候條約ヲ定立スルノ權モ相握リ居候
間則持參致シ居候右委任狀ハ
天皇陛下ノ輔相閣下ヘ差出シ候積ニ御座候
尚又西班牙人用向ノ儀假リニ我公使館ニ相
托シ有之候處今日ヨリ右ロドリゲ、ジエ、ムノ

ズト申者取扱可申候此段不取敢得御意度如
斯御座候以上

佛蘭西國全權公使
マキシム、ウートトレー

午正月二十二日

澤卿

寺嶋大輔

閣下

○白耳義國領事ヘ返翰

貴國第十二月二十九日第一月四日同月二十
九日二月十四日附御書簡四通共落掌白耳義
國物産ノ儀ニ付御申越ノ趣承知致シ候然ル
處我十二月五日附返書ニテ申述候通リ當今
我政府ニテ別ニ入用ノ品無之尤追テ貴國ヘ
注文ノ品モ有之候ハヽ其節申入候間可然御
周施御賴ミ申候右回答申入度如此御座候以
上

明治三年庚午正月廿二日　外務大少丞

白耳義國領事
ヒ、ストロース

貴下

○西班牙國公使ノ來翰（此返翰本月廿四日ニ在）

以手紙致啓上候然ハ今般拙者當港ヘ着致シ
貴國在留西班牙代理公使ノ職ヲ被申付并ニ
千八百六十八年十月廿八日ニ兩國ノ際ニ相
結候條約本書為取替ノ職モ更ニ被命候ニ付
即チ閣下方ヘ御披露申上候右條約面ニ基キ
候ヘハ本書為取替ハ西洋當年五月廿八日迄
ニ全ク相濟ベク ト掲載有之候間貴政府ノ輔
相閣下ヘ可差出委任狀所持致シ居候右差出
スベキ日限御決定ノ上承リ度尚又我國政府

ノ代リトシテ
天皇陛下ヘ拜謁ノ日限ヲモ御懇切ノ周旋ヲ
以テ承リ度存候乍序拙者ノ敬意相表申度此
段可得御意如斯御座候以上

西班牙國代理公使
ヘブレヌロドリゲ、ジエムノズ

午正月廿二日

澤 御

寺嶋大輔

二十三日

閣下

神奈川縣ノ復輸

去ル十九日夜佛蘭西商人ガメン方ヘ同人通ヒ小使春吉忍入ガメンヘ并厨奴ヘ為疵負春吉ハ同館ノ者ヨリ疵受相果候段同廿一日便ヲ以テ申進置候處右ハ春吉死去致シ候上ハ事跡一向不相分殊ニ同人一人ノ事故何レニモ捕捕置其段可訴出筈ノ處無下ニ及暴殺其上ニテガメンノ寢所ニ有之洋銀ヲ奪掠セシ為メ忍入候趣申立候テハ前文ガメンヲ起シ候トノ儀不相合候間猶事實取調可申進旨纏々御申越候趣致承知御尤ノ筋ニテ當方ニテモ心付夫是紛中ニ有之相果候春吉ハ同人ノ外御國人不居合吏故此上同人身寄又ハ兼々懇意致シ候者取調ノ上相紛不申候ハデハ彼方ヘ引合可申辞柄モ無之候ニ付專取調中ニ有之候間紛方出來之上檢使書トモ一同差進可申候先此段及御報候也

正月廿三日　神奈川縣

外務省

御中

10 20 (YH 特製)

二十四日

○西班牙國公使ヘ返翰

我正月廿二日附ノ貴翰落手然ハ今般閣下代理公使ノ職ヲ被命遠洋無恙御渡來相成候段抃喜ノ至ニ候就テハ條約本書為替ノ儀モ御奉命ニ付我天皇陛下ヘ謁見ノ日限并ニ三條右大臣ヘ御面晤ノ儀共云々御申越ノ趣致承知候兩樣共早々奏聞ノ上確定ノ日限可申進候間右以前御委任狀寫御差越有之候樣致度此段御報旁如斯御座候以上

明治三年庚午正月廿四日　寺嶋大輔

西班牙國代理公使

澤　卿

ヘブレヌ、ロドリゲ、ジエムノズ

閣下

二十五日

○佛蘭西國公使ヘ返翰

我正月廿二日附ノ貴翰落掌然ハ今般西班牙政府代理公使ヘブレヌ、ロドリゲ、ジエ、ムノズ氏我國ヘ到着被致候段御報知就テハ是迄同

國ノ用向ハ貴館ニテ御取扱有之候處爾後同
氏取扱ノ段御申越ノ趣委細承知致シ候此段
御報如斯御座候以上

明治三年庚午正月廿五日　寺嶋大輔

佛蘭西國全權公使
マキシム、ウートレー　澤卿

○同國公使ヘ往翰

以手紙致啓上候然ハ大坂在留貴國商人ジョ
バン外一人所持ノ二分金御同シ有之候ニ付
其筋ニテ檢査為致候処何レニテ製シ候哉ハ
難分候ヘ共洋製ニテハ無之旨ニ付無異議引
替可申旨早々大坂府ヘ可申遣就テハ委細ノ
儀同所在留貴國領事ヨリ同所官員ヘ御掛合
有之度存候此段可得御意如此御座候以上

明治三年庚午正月廿五日　寺嶋大輔

佛蘭西國全權公使
マキシム、ウートレー　澤卿

閣下

閣下

尚以昨年中ジブスケ貴下ヨリ被差出候二分
金十兩及返却候

○水野外務少丞兼水原縣大參事儀被免兼官
廿六日

○佛蘭西國書史ノ復翰
當月十日附御書翰落手致シ候然ハ我國軍艦
「アスピック」ト申船ヘ乘組居候高尾恭次郎ノ代
リトシテ日下敬三ト申者御出張被成度ノ儀
委細御來示ノ趣同船々將ヘ申遣置候今拙者

承知罷在候廉々不取敢先ツ左ニ申入候右軍
艦如今修復可致破損所有之候間西洋第四月
迄ハ横須賀港ニ可止且同船ハ今迄相行候測
量ノ儀當分ノ内相廢シ外ヘ航海可致樣被申
付候哉モ難計且又右測量西洋第四月時分ニ
再ヒ相始メ候ヘハ當年ノ暮前ニ相濟可申乍
去右決定ニ相成候ヘハ早々貴下ヘ御報知可
申上候尚又測量更ニ相始メ候節ハ右日下敬
三ヲ横濱ヘ御差出被下候樣前以テ御頼ミ可
申上存候此段御報如斯御座候以上

佛蘭西國書史

西洋第二月廿六日　コント、デベアル

外務大少丞

貴下

廿八日

○米利堅合衆國公使ヘ返翰

貴國第二月九日附同月十二日附御書簡兩通トモ落手致シ候此程書簡ヲ以テ東京ト横濱ノ間ニ可取建鉄道ノ義ニ付御申立ノ趣御断リ及候処証ヲ引キ理ヲ述ベ縷々御申越殊ニ小笠原壹岐ニ約定ハ貴國千八百六十六年水野和泉ト外國公使ト為取替候約書モ同様ニ可有之抑御論述ノ趣ハ如何ニモ適當不致様被相考候ヘ共今更茲ニ其事ヲ論スルモ言語枝葉ニ渉リ無益ナルベキ間別ニ辞ヲ不費候結句閣下ノ論述セラルヽ處ト我輩ノ辨駁スル所其歸スル所ハ唯先ニ徳川慶喜政權ヲ擧テ我

天皇陛下ニ奉還セシ後其臣屬タル小笠原壹岐一名ヲ以テ如此大事ヲ約定スベキ權アル

ヤ否ヲ決スルノミニ有之其節ノ權ノ有無即
チ今日ノ事々曲直ヲ判スベキモノト存候一
体鉄道取開キ候事抑ハ國益ノ第一殊ニ横濱
ヨリ東京迄仕附候ヘハ中外ノ公利ニモ有之
何モ取隱シ可申筋無之処壹岐トポルトメン
氏トノ約定ハ其蹤跡詭祕曖昧ニシテ此方ニ
其事ヲ預知スル者ナキ事先日ノ書中ニ申述
候如キ而已ナラズポルトメン氏ニモ其情實
ハ承知致シ居ナガラ押隱シ被置候樣ニモ被
存候事有之是レ其跡ノ公明ナラザルハ其事

ノ正大ナラザル故ニ可有之歟全ク其權ノ有
無ヲ徵シ可申候畢竟壹岐所在相分リ當人相
糺シ候ハヽ猶明証モ可有之候ヘ共右等ハ紙
上ニ盡シ兼候事情モ有之候間猶御面晤ノ上
御懇話ニ相盡シ度存候右貴答可得御意如此
御座候以上

明治三年庚午正月廿八日　寺嶋大輔

澤卿

米利堅合衆國辨理公使

チャールス、イ、デ、ロング

○獨逸北部聯邦公使ヘ返輸

閣下

貴國千八百七十年第二月十五日附御書翰落手然ハ横濱波戸場ヨリ外國本船ヘ往復通船乘組水夫共時々不法ノ所為ニ及ヒ候ニ付右通船及ヒ水夫共ノ衣服ニモ西洋數字ヲ以テ番号銘記スヘキ御見込至極御同意ニ付同所官員ヘ早速通達ニ及ヒ候處最早右等ノ規則取調居候趣ノ由申越候此段回答旁可得御意如斯御座候上

10 20 Y H 特製

明治三年庚午正月廿八日　寺嶋大輔

澤卿

獨逸北部聯邦代理公使

ユム、フォン、ブランド

閣下

○西班牙國公使ノ復輸

正月廿五日附御書翰落手致シ候然ハ拙者儀横濱來着致シ候ニ付御祝詞ノ旨謝入候右ハ貴國人民兼テ禮讓ノ厚キヲ證スルニ足リ可申候且

天皇陛下ヘ拜謁并ニ貴國輔相ヘ謁見ノ儀ニ
付御來示ノ趣致承知候尚又前以テ可差出委
任狀寫ノ儀別段差支無之候ヘ共右ハ佛蘭西
ト倭語ノ兩文ニ相譯シ可申候間少々遲延可
相成閣下方ヘ拜顏致候日限ジブスケ氏ヘ御
申聞被下候ヘバ貴國輔相三條右大臣閣下ヘ
ノ委任狀本書差出可申候尤拜謁日限ノ前日
ニ右等ヲ閣下ヘ呈上可仕候右御禮旁如此御
座候以上

明治三年庚午正月廿八日

西班牙國代理公使
ヘブレヌロドリゲ、ジエ、ムノズ

澤卿
寺嶋大輔
閣下

○長崎縣ノ來翰

舊冬御申越ノ支那道臺往復書類取調別紙差
進候間御收入可被下候右ノ内澤知事殿御發
出ノ返翰ハ譯文無之將タ先年支那通商勘合
印信等ノ儀ハ別紙ニテ御承知可被下候也

正月　　長崎縣

外務省

御中

○今參考ノタメ河津伊豆守ヨリ應寶時ヘ送レル書簡ヲ爰ニ出ス即左ノ如シ

大日本長崎奉行河津伊豆守、謹致書

大清國江南道大司憲臺下、曩于壬戌年前高橋美作守在崎間特差僚屬數員拜于貴衙門、面叩通商事宜、及伊等返擢間之其在上邦多承垂青懇切、俾獲諸凡順遂、轉想殷々之誼感不可言、極應早年申謝、奈緣前任交代、加以國家多故、遂致久曠音信、罪甚、頃者我國與歐羅巴諸洲(洲)、迭相往來、我國或有公使奉命出海、或有紳士商民附洋船、而西者時常頗多、行者臨發官給路照、又將其照驗印章、先行領送西洋各國、以便查照、過客以此到處俱安、惟貴邦乃我航客首過之境、針路必由之地、況自往昔以來、風有交誼、非他國比、但此等事、未曾舉行、却與隣近貴國似不能公然往來、俾入境者恰如

平沙落雁、甚是失体、今者更有稟請欲赴
貴地傳習學術或經營商業就便僑寓、向後或有
此等人來、望為
照應、但恐干闌窩入、茲擬將其照驗印章呈送
貴衙門以便查核箚束以昭兩國符信今託在留
敝邦之英國官吏先行寄奉一書、即請
貴臺鼎酌金允、一俟咨回別當專差縷述一切也、
務望、速賜咨覆、曷勝幸甚、謹致
慶應三年丁卯月日
○應寶時ノ復輸

惠風遠布展奉
德音、承
示、貴國人有稟請欲赴中士傳習學術經營商
業就便僑寓者、向後或有此等人來望為照應、擬
將其照驗印章送交道署查核箚束等語、具見
執事謹慎為心言歸於好、查經營商業之人、前於甲
子年二月間、有
貴國官員山口錫次郎等五人來滬、云稱由本國稟
明大將軍乘坐夾板船遊歷各處以習風濤、因有
商人求帶海菜貨物數種至滬消售、求報關納稅

即當刻日回國並不上岸居住旋於稅鈔交清貨
物售完後、起棹回國並未就此僑寓、今
來輸所云、傳習學術、不知所傳係何項學術、是否欲
就中國人傳習抑欲傳與中國人習學、請即詳悉
見示、以憑稟明
上憲主持再行布復
左右事關中外交涉本道職僅監司、絲毫不敢擅主
所有查核
貴國印章照驗之處、未便接收、苟
貴國人來中土、果能入境問禁入國問俗、一守中國

法度、與我小民無爭無忤、則我邊界吏民、知
朝廷懷遠之忱、自能推心置腹、盡信盡誠、皆有賓至如
歸之樂、無庸預囑也、重洋懸盼、肅復以聞、不盡馳
系

同治七年歲次戊辰三月日

應寶時

○長崎總府ヨリ支那上海道台ヘ復輸

前此本邦長崎舊宰、致書
左右、乞以本邦人赴
貴國傳習學術及查核印章等件爲言、

金玉無靳便惠裁示實為欣幸承問所傳係何項學術云々蓋其所謂學術者凡有益於我國家之事不論何項皆欲使之學焉者也至其查核印章

一節

執事敬慎即不敢專但願仍以轉申

上憲是祈如其入境問禁入國守法則我自當預為嚴飭而可不煩敎矣又本邦擧國之政委之將門久矣以之嚮航貴國者不得不稟明於將軍也今皇綱肇就一新

聖躬親總萬機本職因奉

勅命來鎭長崎欽承

皇室之德意將欲以修善隣之好其所言推心置腹盡信盡誠者固所願也曾濤漫々肅復以報不具

慶應四年戊辰閏四月日

○應寶時ヨリ再復輸

載披

來輸新接

音徽藉讃前沈復緘早登

典記為慰承

示、貴邦人士欲來中土學凡學術之有益於
貴國家者皆願受習、此在中國大道爲公、決不稍存
吝惜、惟
貴邦人士、倘亦欲授教於中國民人、究是何項學術、
其間有無趣向異同之処、尚煩
縷示端末、俾可轉稟
上憲察酌辦理、若夫交收查驗印章之說、竊謂可勿
議及蓋
貴國賈船至港、憑藉船牌赴關報驗納稅可遵成軌、
無事更張、至此等受習學術人來、果能一秉

惠函所云、循繩守墨、凡我中華臣庶莫不宣揚
聖化加意綏來、苟間有踰越法度作奸犯科、似宜依
犯事地方律例科罪、與華民之在
貴國者同、其本國官勿庸過問、而卒未聞、華民在
貴國有大過犯者斯非畏法而益守法之明驗歟、據
見以復、惟
執事實利圖之、

同治七年歲次戊辰十一月初九日

名正肅

○唐方通商二付相渡照牌勘合等ノ手續キ

唐船通商ニ付相渡シ候印證ハ信牌ト唱ヘ
先聖堂書物改方ニテ相認舊幕奉行所ヘ差
出譯司會同ノ印章ヲ据當港ヨリ唐船開帆
ノ當日其船主ヲ奉行所ヘ召出シ奉行出座
目通ニオイテ相與ヘ候事

一右給牌ノ節領牌ノ船主ヨリ配銅證文ト唱ヘ
候商法定額規則等ノ請書二通其船主ヨリ奉
行所ヘ差出ス右ノ内一通ハ勘合ノタメ其船
主ヘ下ケ渡シ再度通商ノ節右信牌一同為相
納照シ合セ候事

一給牌差許シ候港門左ノ通リ

南京　寧波　臺灣　厦門　廣東　暹羅
廣南　占城　咬嚩吠　東京　東埔寨
右港門ニヨリ通商ノ銀高夫々差別有之浙江
ヨリ仕出シノ船ハ都テ厦門格ニテ商賣差許
シ候事

一唐商貿易筋ニ付テハ是迄双方官府ノ引合ニ
テ文書往復ノ儀ハ舊記等ニ相見ヘ不申都テ
唐商來港其筋進退ノ儀ハ從來唐通事ノ管轄
ニ相屬シ通商致シ來リ候事

長崎譯司某某某某某特奉
鎮臺憲命為擇商給牌貿易肅清法紀事照得爾
等唐船通商
本國者、歷有年所絡繹不絕、但其來人混雜無稽、
以致奸商故違禁例今特限定各港船額、本年來
販船隻內該其港門幾艘、每船所帶貨物限定估
價約若干兩以通生理所諭條款取具船主某親
甘供結存案、今合行給照、即與信牌一張以為憑
據、進港之日驗明牌票繳訖即收船隻、其無憑據
者、即刻遣回、爾等唐商務必愈加謹飭倘有違犯

條款者、再不給牌票、按例究治、決不輕貸、各宜慎
之須至牌者

譯司
會同
之印

年月日給、

右票給某港門船主某
限到

某年第某番某港船主某回唐具立憑照、
一遵法所禁呂宋其外毋論何處天主教寄住等國
俱不敢前往、

一再來日本之日、不特拔帖連異爾蠻南蠻廟和尚之徒及天主教門黨、乙人不敢載來、

一日本之人、乙人不敢載回

一日本軍器及武將畫像等件、不敢帶回

一足色紋銀、併除准定額銀外之銀及金子、分厘不敢帶回

洋中不敢為非劫掠

一寓中與日本人並無交加差外

一須定銀額幾萬幾千兩、換雜色銀額幾千兩、併送寺送廟各項人事元價銀幾千幾百幾十幾兩、餘

賣銀額幾千幾百幾十幾兩、共幾萬幾千幾百兩、交易俱竣、內計幾百兩准帶版銀、幾萬幾千兩銅觔、幾萬幾千兩色頭什色、幾千幾百兩費用、合算清訖毫無差錯、并無寄留貨物、

一本港登船以至開駕之後、一如從前其結確守、倘若遇風飄到意外之地、亦照條約其結遵守、

一再來之日、帶來貨物、照領定銀額不敢少縮、

一再來之日、從前條約遵守不敢違怠、以上各款不敢背違、如有毫犯、其等人船再來之日、任憑處治、并願受罰、立此存証、

年月日

某年第幾番某港船主某

財副　某

總管　某

二月

官員

卿

己巳七月八日任
己巳七月八日　從三位　守　清原朝臣宣嘉　澤

大輔

己巳七月八日任
己巳四月十九日叙　從四位　守　藤原朝臣宗則　寺島

少輔

大丞

己巳七月十一日任
戊辰五月四日叙　從五位　守　藤原朝臣久成　町田

柯太出張　己巳九月二日任
己巳八月十一日叙　從五位　守　源朝臣作樂　尤山

大丞准席

己巳十月廿九日出仕
戊辰閏四月廿二日叙　從四位　藤原朝臣前光　柳原

權大丞

柯太出張　己巳九月二日任
己巳八月十六日叙　正六位　守　藤原朝臣道之　谷元

己巳十二月四日任
己巳十月二日叙　從六位　守　大神朝臣元綱　三輪田

少丞

己巳七月十二日任叙　己巳十月二日

從六位守源朝臣民之水野

己巳七月十二日任叙　己巳十月二日

從六位守源朝臣俊邁馬渡

庚午正月八日任

無位田邊朝臣太一田邊

權少丞

己巳七月十二日任叙　己巳十月三日

正七位守藤原朝臣小一宮本

庚午二月十八日任

無位藤原朝臣義質北房

大譯官

己巳九月二日任叙　己巳十月十日

從七位守藤原朝臣政方石橋

己巳九月二日任叙　己巳十月十日

從七位守藤原朝臣嘉度立

柯太出張　己巳九月二日任叙　己巳十月十日

從七位守鄭永寧鄭

己巳九月二日任叙　己巳十月十八日

從七位守橘朝臣宗俊子安

各國官員

大貌列顛國特派全權公使

サアハルリー、エス、パークス

書史

フランシス、オッチウヰル、アダムス

譯司

アレキサンドル、フォン、シーボルト

伊太利國特派全權公使

コント、アレサンドロ、フェ

佛蘭西國全權公使

マキシム、ウートレー

書史

コントデ、ベアル

譯司

ジブスケ

米利堅合衆國辨理公使

チャールス、イ、デ、ロング

書史

エル、シー、ポルトメン

荷蘭國辨理公使

エス、ペー、ファン、ドル、フー、フェン

書記

ドンクル、キュルシュス

獨逸北部聯邦代理公使

エム、フオン、ブランド

西班牙國代理公使

ヘブレヲ、ロドリゲ、ジエムノズ

横濱在留領事

瑞西聯邦総領事

シ、ブレン、ワルド

丁抹國總領事

エドワルド、バウキール

大貌列顛國領事

エス、ゼ、ロウドル

荷蘭國領事

ウエ、ファンデル、タック

獨逸北部聯邦領事

エ、ライス

葡萄牙國領事

エドワルド、ロレーロ

白耳義國領事

エル、ストロース

伊太利國領事

シ、ロベーチ

米利堅合衆國領事

レミユール、ライオン

佛蘭西國領事代

デ、ラペロース

大坂在留領事

大貌列顯國領事

エブル、エ、ジ、ガウル

荷蘭國副領事

ウ、イ、ピストリユス

兵庫在留領事

米利堅合衆國領事

セ、コツト、ステワルト

荷蘭國領事

ア、イ、ボードイン

佛蘭西國副領事

ユージンダロス

荷蘭國副領事

ウ、セ、コルトハルス

丁抹國副領事

エッチパラノ

大貌列顯國代辨副領事

ゼ、ゼ、エンスリー

獨逸北部聯邦領事代

エ、イウルス

伊太利國領事代　エッチ、ゼ、グルース

長崎在留領事

米利堅合衆國領事　ダフリユ、ピ、マンゴム

荷蘭國領事　エフ、ビ、トムブリンク

魯西亞國領事　フキリツペウス

佛蘭西國領事　リヨン、デユリー

葡萄牙國領事　ゼー、ロレーロ

獨逸北部聯邦領事　アル、リンドウ

瑞西聯邦領事　荷蘭國領事ヨリ兼帶

丁抹國領事　エッチ、チッフ

大貌列顚國代辨領事

ヱ、エン子スリー

墺地利國領事　大貌列顛國代辨領事ヨリ兼帶

箱館在留領事

大貌列顛國領事

ア、ユースデン

獨逸北部聯邦領事

シ、ガルト子ル

丁抹國領事

ゼ、エッチチェース

米利堅合衆國領事

イ、ライス

魯西亞國代辨領事

ヱス、タラフテンベルク

佛蘭西國領事代

ゼ、エッチチェース

墺地利國領事　大貌列顛國領事ヨリ兼帶

新潟在留領事

10 20 (Y H 特製)

大貌列顛國領事

ゼームス、ツループ

獨逸北部聯邦領事

エ、テ、ライスチル

當時不在ウエーブル代任

荷蘭國副領事

メース

外務省日誌　明治三年庚午第五號　自二月朔日至九日

二月朔日　洋曆千八百七十年第三月二日

○獨逸北部聯邦公使館譯司ノ來翰

貴國去月廿四日附御手紙致披見候然ハ副嶋參議殿吉井彈正少弼殿其他ノ御方集地運上所ニ於テ我國公使ヘ御懇話且御晝餐可被下ニ付我公使出府ノ都合聞合可上旨御申越ニ付此段公使ヘ承合候處貴國來ル三日朝出府可致其日或ハ其翌日ニテモ不都合無之可罷

出旨申聞候此段右兩公等ヘ御申通シ被下時
日ノ処御都合次第前以御申越有之度存候此
段可得御意如此御座候以上

一千八百七十年第三月二日

獨逸北部聯邦公使館譯司
ケンプルマン

外務大少丞

貴下

二日

獨逸北部聯邦公使館譯司ヘ返翰

貴國第三月二日附ノ御書簡落手然ハ副嶋參
議吉井彈正少弼儀其公使閣下ヘ御懇話且粗
未ノ晝餐被進度趣申進候處御承諾有之來ル
我二月三日御出府同日又ハ翌四日ニテモ御
差支無之且前同人ヘ問合ノ上御報可申進旨
御來示之趣則兩人ヘ通達及ヒ候処來ル四日
十二字築地運上所ニ於テ御面接致度旨申越
候間其公使閣下ヘ御通達有之度此段御報旁
如此御座候

庚午二月二日

外務大少丞

獨逸北部聯邦公使館譯司

ケンプルマン

貴下

○伊太利國領事ノ來翰（復翰ニ在十九）

以手紙致啓上候然ハ蚕種ノ儀追々其時期ニ至リ候間當年ハ其數ヲ限リ内地ヨリ輸送可致旨生糸ヲ産出スル州郡ノ生糸ヲ産業トル者等ヘ御觸渡シ有之候歟然ラザレバ其高自然定限致候樣ノ御處置有之度旨貴國商人トモヨリ貴政府ヘ建言願書差出候トノ義ハ實

説ニ有之候哉去ル十三日外務省ニテ拜晤ノ折御尋申上候處其節右一件ハ其筋ヘ問合セ早々貴答被成下候趣尊諭有之候儀ニ御座候然ルニ蚕卵商賣ノ儀ハ我國人ニ甚緊要ニ御座候ヘハ右早々貴答被下候樣致シ度更ニ奉懇願候以上

一千八百七十年第三月三日

伊太利國領事

シロベーチ

澤

卿

寺嶋大輔

○土子外務省掌任史生

○黒柳外務省掌任史生

○佛蘭西國公使ヘ往翰

以手紙致啓上候然ハ來ル我二月七日夕第六

字西班牙國代理公使延遼館ヘ相招候ニ付閣

下ニモ御差支無之候ハヽ同刻ヨリ御入來被

下度存候此段為御案内可得御意如此ニ御座

候以上

閣下

二月四日

寺嶋大輔

澤卿

佛蘭西國全權公使

マキシム、ウートレー

閣下

○西班牙國公使ヘ返翰

以手紙致啓上候然ハ兼テ御申立有之候我

天皇陛下ヘ謁見ノ日限及奏聞置候處來ル

七日午後第一字參朝有之候樣御達可申旨

下命有之候間此段御通達得御意度如此御座

候以上

明治三年庚午二月四日　寺島大輔

澤卿

西班牙國代理公使

ヘブレヌロドリゲ、ジエ、ムノズ

閣下

○西班牙國公使ヘ往翰

以手紙致啓上候然ハ今般遠洋無滯我國ヘ御渡來有之欣喜不斜隨テ來ル七日第六字閣下并書史兩名トモ延遼館ヘ招待イタシ度候間

御差支無之候ハヽ來臨被下度此段可得御意如斯御座候以上

明治三年庚午二月四日　寺島大輔

澤卿

西班牙國代理公使

ヘブレヌロドリゲ、ジエ、ムノズ

閣下

六日

○佛蘭西國公使ノ來翰

當月四日附御書簡只今致落手候然ハ明七日

延遼館ニ於テ御待請被下候趣右御饗應ノ義
奉深謝候然ル處何分家室并拙者急用有之候
間横濱ヲ離レ兼テ殘念御斷リ申上候右序ヲ
以テ更ニ我尊敬ヲ表シ申度此段可得御意如
此御座候以上

二月六日　佛蘭西國全權公使
マキシム、ウートレー
澤　卿
寺嶋大輔
閣下

七日

○西班牙國公使參朝
但シ代理公使持參書輪同口述并
勅語寫等太政官日誌ニ出ツ今畧之
西班牙國公使參朝後於延遼館饗應アリ官
員對食左ノ如シ

遠外務少丞
田
佛蘭西國書記官
西班牙國公使
德大寺大納言
寺嶋外務大輔
三輪田外務權大丞
馬渡外務少丞

柳
西澤西班牙國公使
原從
四位一等書記官

長岡少輔

テーブル

宮本外務少丞

九日

○荷蘭國舊公使ノ來翰

以手紙致啓上候然ハ丁抹國王陛下ノ側用人ジユリーンシーキ氏大日本在留丁抹國特派全權公使ニ被命同氏第四月十九日郵船ニテ出帆可致候右ハ第一月廿一日附第八号ノ書簡ニテ申上候趣モ有之候間御報知致候右可得貴意如斯御座候以上

千八百七十年第三月十日

在ハーグ

荷蘭國舊公使

ドデ・カラースファン、ポルスブルク

澤卿

寺島大輔

閣下

○大貌列顛國公使ノ來輸

以手紙致啓上候然ハ千八百六十七年第五月

廿三日附ノ書簡ヲ以テ幕府ヨリ被仰越候内

海燈明臺彌御取立相成候樣伊藤民部少輔殿

ト此程ヨリ度々御談話致シ候仍テ別紙目錄

ノ通リ六箇所ノ燈明臺諸器械早速英國ヘ致

注文候事ニ御座候然ル處以前燈明臺器械注

文ノ為メ英國ヘ送リ候金高ヨリハ餘計ノ入

費ニ當リ候ニ付此度我政府ヘ五千ポント御

遣ニ可相成事是亦御承知ニ相成居候間右五

千ポントヲ為替手形拵者方ヘ御遣ニ相成當月

十一日英吉利飛脚船ヘ差出可申積ニ御座候

間貴省ニ於テ此書簡御落手被成候ハヽ閣下

ヨリ民部省ヘ右ノ趣御通達有之候樣致シ度

存候此段得御意度如此御座候以上

二月九日　大貌列顯國特派全權公使

サヽハルリ、パークス

澤　卿

寺嶋大輔

閣下

別紙

日本政府ニテ要スル燈明臺器具ノ覺

千八百七十年第二月二十四日

場所	品種	光輝ノ達スル度	海面上ヨリ高サ
和泉ノ瀬戸（トマカイ嶋ノ西ニアタル）	第三	二百三十九度	二百十フート
明石淡路嶋ノ北ニ當ル	第一	二百〇四度	百五十フート
伊崎（下ノ關瀬戸ノ東ノ入口）	第四	二百六十三度	八十フート
六連嶋（下ノ關瀬戸ノ西ノ入口）	第四	二百四十度	七十六フート
大坂港ノ燈明	第四	三百度	七十六フート
兵庫〃	第四	三百度	四十フート

○大貌列顯國公使館書史ノ來翰

以手紙致啓上候然ハ拙者儀明後十一日東京出立相州江ノ嶋邊迄罷越品ニヨリ豆州熱海迄旅行致シ度候間其節差支等無之樣御取計可被下候時宜ニヨリ人馬相雇ヒ候儀モ可有

之哉ニ存候間此段宜ク御賴ミ申候尤其節我
國人兩人同道致シ候心得ニ御座候此段御賴
得御意度如斯御座候以上

二月九日　　大貌列顯國公使館

書史　アダムス

寺島大輔

閣下

○大貌列顯國公使館書史ヘ返翰

御手紙披閲然ハ貴下御儀明後十一日貴國人
兩人御同道東京御出發相州江ノ島ヨリ殊ニ
寄リ豆州熱海迄モ御旅行有之候旨御申越ノ
趣承知致シ候就テハ例ノ通リ別手組為附添
可申尤其筋ヘモ夫々通達致シ都テ御差支無
之樣取計申候此段回答得御意度如此御座候
以上

明治三年庚午二月九日　外務大少丞

大貌列顯國公使館

書史　アダムス

外務省日誌　明治三年庚午第六号（自二月十三日至廿四日）

二月十三日　洋曆千八百七十年第三月十四日

○荷蘭國領事ヘ往翰（復翰廿四日ニ在）

以手紙致啓上候然ハ貴國醫師ボードイン氏當時大坂大病院ニ雇入相成居候處當三月（西曆四月）期限ト相成候間直ニ猶一箇年ノ間同所軍事病院ヘ雇入度旨兵部省ヨリ申出候御差支無之候哉承リ度候此段可得御意如斯御座候以上

貴下

1020 (YH特製)

明治三年庚午二月十三日　外務大少丞

荷蘭國領事

ウエファン、デル、タック

貴下

○獨逸北部聯邦公使ヘ往翰（復翰ハ十六日ニ在）

以手紙致啓上候然ハ貴國醫師兩人今度我醫

學校ヘ相雇度候ニ付テハ則左ノ通取極可申

存候此段御打合ニ及ヒ度如此御座候以上

明治三年庚午　外務大輔

二月十四日　寺島從四位

大學別當

松平正二位

外務卿

澤從三位

獨逸北部聯邦代理公使

ユム、フォン、ブランド

閣下

約書

一獨乙國醫者二人三年ノ間大日本政府ニテ

可相雇候事

1020 (YH 特製)

一月給ノ儀ハ第一等ノ醫者一ヶ月洋銀六百
枚第二等ノ醫者三百枚可相拂事
但是ハ二人横濱上陸ノ日ヨリ大日本曆
ニ從ヒ可拂事
一右二人相當ノ住宅相渡可申事
但食事其外召仕雇人ハ自分ニテ相辨ヘ可
申事
一二人往復ノ旅用可相渡則大日本ヘ渡船ノ
旅費トシテ此節洋銀一千枚宛相渡追テ歸
國ノ節ハ壹千枚相渡可申候

一本國出立支度入用トシテ第一等ヘ洋銀一
千枚第二等ヘ六百枚此節相拂可申候
一第一等ノ醫者ハ大日本東京醫學校教師頭
取タルヘキ事
一學制規則大丞大博士ヘ申談シ別當調印ノ
上施行可致事

十五日

○獨逸北部聯邦公使ヘ往輸復輸十七日ニ在
以手紙致啓上候然ハ獨逸語學教師トシテ貴
國人一人今度我大學南校ヘ相雇度尤英吉利

語佛蘭西語ヲモ通曉イタシ候者御撰擧被下
度就テハ左ノ通取極可申存候此段及御賴度
如斯御座候以上

明治三年　外務大輔

庚午二月十五日　寺島從四位

大學別當

松平正二位

外務卿

澤從三位

獨逸北部聯邦代理公使

ユムフォンブランド

閣下

約書

一教師三年ノ間可相雇事

一壹箇年墨斯哥銀二百枚可相拂事

但同人横濱上陸ノ月ヨリ大日本曆ニ從
ヒ可拂事

一同人住宅廐相渡可申事

但家財等一切不相渡候事

一同人往復ノ旅費可相渡尤大日本ヘ渡航ノ

旅費トシテ此節一千枚相渡追テ歸國ノ節
一千枚相渡可申事
一本國出立ノ支度入用トシテ洋銀四百枚此
節相拂可申事
一書生二十人傳習ノ為メ相當ノ書籍買入ノ
入用トシテ墨斯哥銀三百枚此節相拂可申
事
一同人着ノ上學則ヲ建大學別當調印ヲ受施
行可致事
十六日

○獨逸北部聯邦公使ノ來翰
貴國第二月十四日附尊翰致披見候然者獨逸
國醫者一人東京醫學校ヘ御雇被成度御所望
ハ拙者本懷ノ儀ニ付我政府ヘ可申立候右ノ
事ニ付閣下御定被成候御規則モ可然ト存候
且第一等醫者ハ貴國ニテ御雇相成候外國教
師又ハ士官ノ支配ヲ不受專ラ大學別當御配
下ニ屬シ可申候尤右二人路費出立支度入用
トシテ墨斯哥銀二千枚并ニ一千六百枚御遣
次第右ノ者早速貴國ニ渡海致シ候樣可致候

右ノ段御報旁如此御座候以上

千八百七十年第三月十七日

獨逸北部聯邦代理公使

ユムフォン、ブランド

外務卿

澤　從三位

大學別當

松平正二位

外務大輔

寺嶋從四位

1020 (Y日特製)

各位閣下

○獨逸北部聯邦公使ノ復輸

貴國第二月十五日附尊翰致披見候然者我國教師東京大學南校ヘ御雇被成度旨御申越ノ趣致承知候右ノ儀ニ付御定被成候御規則可然存候且墨斯哥銀一千七百枚（内一千四百枚ハ路費并ニ出立支度入用三百枚ハ書籍買入ノ入用）御遣シ相成候ヘハ早速右教師ハ貴國ニテ御雇被成候外國教師又ハ士官ノ配下ニ屬セズ唯大學別當ノ御支配ヲ受可申候尤貴國政府ニテ右教師ヘ被為托候書

生ニ御勸被成務テ無怠情修學致シ教師訓導
方實効相立可申樣致シ度相願候右ノ段御報
旁如此御座候以上

千八百七十年第三月十八日

獨逸北部聯邦代理公使
エム、フオン、ブランド

外務卿
澤　從三位

大學別當
松平正二位

外務大輔
寺島從四位

各位閣下

○花房外務大錄義質任權少丞

○魯西亞國領事ノ復翰

貴國十二月十二日附御書翰我當月十五日致
落手候然ハ我新年ノ御祝詞并兩國懇信ノ不
相替厚カラン事ヲ御希望ノ趣御申越致深謝
候附テハ拙者ヨリモ貴國新年ノ祝詞并御懇
親ノ段疾ニ謝辭可申述ノ處東京箱館ノ往復

不定ニ付今日迄延引ニ及ヒ殘念ノ至ニ御座候即今兩國懇親ノ儀ハ交際ノ事務委任ノモノ只管盡力致シ居候ヘハ追日深厚相成可申ト被察候右ノ段可得御意如斯御座候以上

千八百七十年第二月十五日

魯西亞國代辨領事

外務大少丞

エス、タラフテンベルク

貴下

○大貌列顛國公使ノ來翰

以手紙致啓上候然ハ本月九日附ノ書簡ヲ以燈明臺器械ノタメ民部省ヨリ五千ポントステルリング御遣シ被成候樣申入候處即御遣シニ相成正ニ致落手候右ハ去ル十一日飛脚船ヲ以テ本國ヘ相送リ申候此段可得御意如斯御座候以上

庚午二月十八日

大貌列顛國特派全權公使

サアハルリー、パークス

澤卿

寺嶋大輔

閣下

○諸官省校院臺使府藩縣へ達書

近來外國人ヲ雇入各般使用ニ供シ候向有之
右ハ兼テ御沙汰ノ通願濟ノ上ハ不苦事ニ候
ヘ𪜈雇入方不案内ヨリ疎漏ノ約定ニ及ヒ或
ハ其雇入ヘキ人物ノ撰方精細ナラス後來不
都合ノ趣追々相聞エ候間大略ノ心得方別紙
ヲ以テ布告ニ及ヒ置候凡右ヲ標準ト致シ可
願出案々ハ其手順ヲ失ハザル樣可相心得候

依テ此段申進候

二月十八日

外務省

別紙布告世ニ施行ス依テ略ス

十九日

○本省出仕坂田季篤任外務史生

○本省出仕水野良知任外務省掌

○本省出仕宮木鳴任外務省掌

○伊太利國領事ヘ往輸

以手紙致啓上候然ハ先頃外務省ニ於テ御談
有之猶御書中ニテモ御申越有之候鬢卵紙之

儀等閑ニ打過候儀ニハ無之候へ共右ハ當省
ノ取扱ニ無之處ヨリ他省ヘ問合セ彼是往復
ニ時日ヲ費シ今日ニ至リ不本懷ノ至ニ候右
蚕卵紙ハ全ク作高ニ定額ヲ極メ餘ハ停止為
致候ト申儀ニハ決シテ無之則別紙民部省ヨ
リ布告相成候ニ付此趣ニ付テ御疑惑被成候
儀ニ被察候間右寫為御心得差進申候右可得
御意如斯御座候以上

明治三年庚午二月十九日

外務大少丞

伊太利國領事

10 20 (Y H 特製)

シ、ロベーチ

貴下

別紙布告書

蚕紙渡世ノ者近來漫リニ相成夜附其外性合
不宜品製作賣捌致シ夫カ為中外商人破産ノ
者不少右ニ付製作人共後日可相紀節出所不
相分差支候ニ付向後為取締鑑札ヘ紙數ヲ記
シ相渡筈ニ候條得其意其府藩縣支配中貿易所
ヘ可差廻分総員數凡目當并鑑札願請書名前
トモ早々取調來二月廿日迄ニ通商司ヘ可申

出事

正月　民部省

廿四日

○荷蘭國領事ノ復翰

二月十三日附貴翰落手致披見候然ハ右貴翰ノ回答トシテ醫官ポールドイニヨリ差出候書狀致拜送候間右ニテ同氏猶此後モ貴政府ニ勤務可致趣意ニ有之候儀御承知有之度存候

右貴答如斯御座候以上

千八百七十年第三月廿五日

10 20 (Y H 特製)

荷蘭國領事

ファン、ドル、タック

外務大少丞

貴下

○荷蘭國醫官ノ來翰

以手紙致啓上候然ハ閣下等ヨリ在横濱荷蘭領事ヘ御書送相成候ニ付拙者儀猶一ヶ年ノ間大坂軍兵病院ニ奉職可致旨同人ヨリ掛合有之候就テハ右御望ニ從ヒ候儀最希願スル處ニハ有之候ヘ共昨今ノ處ニテハ先ツ半ヶ

年則第十月迄ト相定メ御約束致兼候尤其後
半ヶ年モ奉職可致哉否ハ其時ノ景況ニ關係
致シ候儀ニ御座候拙者當地ニ在留スル節ハ
軍務ノ醫業ヲ以テ病客療治ノ事ニ出精可致
候間右願意御聞濟被下候ヘハ速ニ其趣御決
定被下度奉願上候以上

千八百七十年第三月廿日

大坂府病院附屬醫官

ボードイン

外務大少丞

貴下

1020 (YH 特製)

10
20
(YH特製)